
仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

水城柳羅

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

【Nコード】

N38730

【作者名】

水城柳羅

【あらすじ】

すべてのライダーを敵に回してしまった門矢士 仮面ライダーディケイド。

『来るなら来い、全てを破壊してやる!』

破壊者と化したその瞳は何を見る？

多くの視聴者をいよいよに裏切った2009年冬の陣公開から早10ヶ月。

やはり書くとしたらまずはこれかなと思い、あの有名な偽予告を面白いうように使おうとたくらんでみた執筆者だが、何せ初心者で闘いのシーンが物凄く苦手という、ライダー小説を書くのに一番最悪な欠点を持っているのだが、それでもがんばって書いてみた。いろいろと不自然なところもあるだろうが、目をつぶってみていただきたい。

主要キャスト陣紹介

すべてのライダーを敵に回してしまった門矢士 仮面ライダーディケイド。

『来るなら来い、全てを破壊してやる！』
破壊者と化したその瞳は何を見る？

主要キャスト陣紹介

門矢士（仮面ライダーディケイド）

光夏海（後の仮面ライダーキバラー）

小野寺ユウスケ（仮面ライダークウガ）

海東大樹（仮面ライダーディエンド）

光栄次郎

キバラー

鳴滝（本当の正体は・・・？）

紅渡（仮面ライダーキバ）

剣崎一真（仮面ライダー剣）

津上翔一（仮面ライダーアギト）

城戸真司（仮面ライダー龍騎）

乾巧（仮面ライダーファイズ）

ヒビキ（仮面ライダー響鬼）

天道総司（仮面ライダーカブト）

野上良太郎（仮面ライダー電王）

五代雄介（仮面ライダーダークウガ）

主要キャスト陣紹介（後書き）

みなさん、初めまして！水城柳羅といます。
これまでためにためてきたものを一気にここで
出していこうと思ってます。

文章が結構おかしいところもあると思いますが、
大体は目をつぶっていただきたいです（笑
誤字・脱字等は、教えてください！！

これから頑張って更新していきますので、
応援よろしくお願いいたします。

水城柳羅

ブログ すべてはここから始まった・・・

『ウオオオオオオオオオ!!』

激しい叫び。激しい攻撃の渦の中に、一人の女が立ちつくしていた。

「なぜこんなことに・・・？」

白いドレスはもうすでに黒ずんでいる。

彼女の名前は光夏海。

自分の格好などどうでもよかった。目の前で起こってることのほうが彼女にとって、重要なことだったのだ。

今まで旅をしてきた中で出会ってきたライダーばかりが一人のライダーを倒すために闘っていた。

「そっだ・・・！ユウスケ!!」

夏海は思い出したように、隅に倒れていた一人の男に駆け寄った。先ほどの闘いで、ある人物をかばったせいで命を落としてしまっていた。もう彼は目覚めない。でも夏海にとってそんなことは関係ない。今はあの一人のライダーを救うために動くことしかできなかったのだ。むだだと知りながらも・・・。

「ユウスケ！目を覚ましてください!!ユウスケ!!」

それをじつと見つめる男がいた。ベージュのハットにベージュのコートをかぶった謎の人物……。そのそばには白くて小さい蝙蝠がとんでいた。

「ねえ、鳴滝さん。アタシにいい考えがあるんだけど?どう?」

謎の男・鳴滝と呼ばれた男・は、黙り込んだまま動かない。一点を睨みつけたまま。

蝙蝠はそれをどうとつたのかはわからないが、夏海の傍へ向かっていった。

「夏海ちゃん、わたしがよみがえらせてあげようか?」

「え?キバーラが?どうやって・・・」

白蝙蝠・キバーラ・はユウスケと呼ばれた男の人差し指を噛んだ。するとどうだろう。一瞬にしてよみがえったのである。

「ただし、アルティメットクウガとしてね。」

「え・・・。ユウスケ・・・?きゃっ!!」

ユウスケは夏海を突き飛ばし、一人のライダーのもとへと駆け寄る。

「・・・変身・・・!」

仮面ライダークウガ。みんなの笑顔を守るために戦う。それが彼の使命だった。

しかし、今の姿はそんな使命のかけらもない。

一目散に駆け寄るその姿を見たマゼンタ色のライダー・仮面ライダー・デイクイド・は、驚いたような表情をした。

「・・・ユウスケ・・・?!!」

そのすきをついて攻撃を仕掛けてくる他のライダー達。

少し離れたところでその様子をうかがうシアン色のライダー - 仮面ライダーディエンド -。

闘いに加わるうともしなければ、ディケイドの援助にもいかない。ただ、その様子を眺めていた。

(今が潮時かもしれないな・・・)

そのとき。

大勢のライダー達の動きが止まった。

ディケイドにディエンドライダーを向けるディエンドを見て。

「・・・海東。」

「土・・・(少し我慢してくれ)」

「え・・・?」

『バンっ!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!』

一発の銃声が放たれた。

その様子をニヤリと笑いながら去っていく鳴滝とキバール。

大勢のライダーが呆然と立ち尽くす。

夏海「・・・デイクイドー！！！！！！！！！！」

プロローグ すべてはここから始まった・・・（後書き）

はい！わかりにくいプロローグが終了しました！（爆

まあ簡単に言うと、ほとんど本編最終回のあの場面と同じです。

若干鳴滝の言葉を入れたり、いろいろと変えたりしたところもありますが、大体一緒です（笑

最後の夏海の叫びも同じです。

今後の進め方としては、あの偽予告を元に私が考えるライダー大戦小説を書きあげていこうと思っています。

もうすでに構想・執筆は最後のほうまで進んでいるので、完結までの時間は短いかなあと思っています。ただ、UPが遅れるかもしれないですけど（笑

それではまた第1話にてお会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第一話 デイエンドと8人のライダー

夏海「（大樹さんが土君を・・・?!）」

黒ずんだ白いドレスを着た光夏海は混乱していた。

目の前には倒れこんだデイケイド、9人のライダーに囲まれたデイエンドが立っていた。

しかし、混乱しているのは夏海だけではなかった。

Eキバ「デイエンド、あなたはいったい何をしようとしているのですか？」

DED「別に？僕がしたいようにやるだけさ。邪魔をするなら君たちも撃つけど？」

K剣「ふっ。この状況でよく言えるな。お前の役目を忘れたのか？」

DED「役目？何かな、それは。」

K剣「とぼけるな!!」

アギトS「（ニコニコと笑っている）」

555A「おい、どういうことだ？デイケイドは死んだのかよ。」

カブトH「そんな訳はない。気絶させられているだけだろう。」

龍騎S「マジかよ!!じゃあ俺が倒すまでだぜ!!」

カブトH「まあまで。お前には無理だ。俺がやる。」

龍騎S「なんだとお?!!」

電王L「と、とにかく!!この状況をどうするんですか？渡さん。」

響鬼A「まあまあ。」

Kキバ「・・・デイエンド。どういっつもりかはわかりませんが・・・、ちゃんと話してもらいますよ?」

DED「だったらこうするまでだよ。」

「ATTACK RIDE INVISIBLE !!!」

海東は倒れている土を連れて、どこかへ消えた。

K 剣「ちっ！忘れていた、あのカードがあつたか！！」

E キバ「迂闊でした。」

8 人のライダーたちは変身を解く。

剣崎と渡を残し、あとの6人はディエンドを探しに出かけた。

夏海はわからなかった。

なぜディケイド・門矢士・が破壊者と呼ばれているのか、士くんが悪いのか。士くんを倒さない限り本当に世界は救われないのか・・・。

夏海「あの・・・！」

剣崎「・・・光夏海・・・だったか。」

夏海「はい。士くんがなぜ破壊者と言われるのか教えてください。本当に士くんを倒さなければいけないんですか？！」

渡「正確にはディケイド、ですが・・・。」

剣崎「渡、それ以上言ったらだめだ」

夏海「ど、どういうことですか！だったら・・・ディケイドの存在が士くんだから・・・？だから倒されてしまうんですか・・・？」

渡「・・・ディケイドの存在が世界を破壊へと導いていったのです。僕たち8人の世界もディケイドによって破壊されてしまった・・・！」

夏海「・・・そんな・・・！」

渡は目の前で世界が破壊されていくのを見ていくことしかなかった。目の前とともに戦ってきたイクサが消えた。何もできなかった。どうしようもなかった。

剣崎も・・・ほかのライダーたちの世界も同様に、だ。

夏海「だからディケイドを・・・士くんを倒すんですね？」

渡「今はそれをするしか方法がないんです……!!」

遠くのほうで究極の闇と化してしまったユウスケが叫んでいる。
必死になって何かを探しているように見える。

ウクウガ「デイケイドオオオオオオ!!」

剣崎「……渡。アレはどうする?自我もないようだが……」

渡「我々のすべきことはデイケイドを倒すこと。彼の目的も今の状態であれば同じでしょう。」

剣崎「光夏海。お前の考えもわかる。仲間ならそう思うのは当然のことだ。だが全世界のために……わかってくれ……!!」

夏海「私には何もできない。土くんのために何かしてやることもできない。守ることだってできない……」

夏海「(私はどうすれば土くんを救えるの……?)」涙を流す夏海。

鳴滝「夏海君……」

夏海の前に鳴滝が現れた。

夏海「……鳴滝さん……?」

鳴滝「破壊者デイケイドをとめることができるのは君だけなんだ。」

夏海「……私だけ……?」

鳴滝「世界を救おう。そのためには君に真実を話さねばならない。」

夏海「……真実……?」

第一話 デイエンドと8人のライダー（後書き）

第一話。いかがでしたでしょうか！

・・・なんだかよくわからない感じになってるかもしれないんですけど・・・（笑 許してください）（笑
いろいろと伏線をつけとかなければいけないので、まだまだなぞの
感じを漂わせて見ました。

次回は海東と士の2人メインでお送りします。
お楽しみに！！

すべてを破壊し、すべてをつなげ！！

第二話 海東と士（前書き）

今回は海東と士メインで動きます。
心理的描写が多めだと思います。
会話が多い……です（汗）

海東「士。これからも僕のことを見ていてくれよ？」
士「……うるさい。」

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二話 海東と土

先ほどの場所から少し離れた洞窟の中に海東はいた。

その場に土を寝かせると、自分自身はその傍に座った。

海東「（僕の本当の役目・・・か。そんなものとうに忘れたさ。）」

ふと海東は視線を土に向けた。

海東「（僕も変わったなあ。）」

今までの自分なら仲間などという馴れ合いじみた関係を作ることとはなかった。

仲間と思っても裏切られる。結局はひとりだ。そんなふうに思っていた。

その気持ちに何らかの変化があったのだと思う。彼はそうなった原因をわかっていた。

海東「・・・土。ちゃんと借りは返したよ。」

海東がその場を離れようとすると、小さな呻き声が聞こえた。

土「・・・うん・・・っ・・・」

海東「・・・！土・・・？！」

土「海東・・・か・・・。ここはどこだ？」

海東「洞窟の中だ。追手はまだきていない。」

土「・・・！な、ナツミカン！！・・・っ！！」

海東「まだ動かないほうがいい。剣崎くんにやられた傷もまだ完治していないようだね。ナツメロンはいないよ。だけど彼らも一応

人間だ。生身の人間を傷つけたりはしないさ。悪魔のようなやつらばかりだけだね。」

海東は何かを思い出すような表情をしてうつむいた。

士「・・・海東？お前はあいつらのこと知ってるのか？」

海東「まあね。しばらく一緒に行動をしたこともあったし。ただ今はしていないよ。」

士「ユウスケはどうなってる？・・・まだあのままなのか？」

海東「ああ。きつとずっとあのままだと思う。」

士「なっ・・・！！！」

海東「（『これまで』もそうだった。アルティメットクウガになったら・・・もう元には戻らなかった。そしてディケイドが世界の全てを、ライダーを、自分自身をも壊して、終わり・・・。だけど本当にそれでよかったのか？結局またディケイドが生まれて、世界は滅亡に向かっている。また『あれ』を繰り返すというのか・・・！）」

海東の表情が一瞬歪んだ。それを見た士はそのことには触れず、あえて『いつもの士』を演じた。

士「ちっ！今度はおれが借りを作ったな。面倒なもんだ。」

海東「何を言ってるんだい、士。これは僕が君に作った借りを返しただけさ。」

士「海東。ようやくいつもの顔に戻ったな。」

海東「え・・・？」

士「気づいてなかったのか？今まで死んだような眼だったぞ？その顔写真を撮ってネットで流してやりたかったくらいに、な。」

海東「・・・士、それだけはやめてくれ。」

士「写真すら撮ってないから安心しろよ。」

海東「そんなこと言ってる土も土だよ。ナツメロンや小野寺くんのことか気になってしょうがない、って顔をしてるからね。」

土「べ、別に……！危ない所に置いてきちまったからな。ただそれだけだ……！」

海東「はいはい、わかったよ。心配な気持ちもわかるし、今すぐにも向かいたい気持ちもわかる。だけど今の体じゃ無理だ。それに小野寺くんにはもう自我がない。今行ったら叩きのめされるだけさ。」

土「わかつてる……！」

口ではそう言っている土だが、顔には『今すぐにも向かいたい！』と書いてある。それだけは避けなければならなかった。これから闘うであろう8人のライダーとユウスケと……。

土「……お前らしくないな。」

海東「何がだい？」

土「そんな辛気臭い顔をしゃがって。何を考えてる？それにおれを助けたり。何がしたいんだ？何のために？」

海東「土自身がお宝だからさ。お宝を求めるのが僕の本性だろ？」

海東は気付いた。土が泣きそうになってることに。

海東「土もらしくないな。泣いてるのかい？」

土「泣いてない。……お前は他の宝を探してくれ」

海東「……何を言ってるんだい？」

土「お前は俺を仲間と言ったな？だが仲間って言葉はお前が一番嫌いな言葉のはずだ。なぜ使った？」

海東「……なぜだろうね。僕自身わからないよ。」

土「だったらもう使うな。俺のことは忘れる。この世界から出ていけ。」

海東「・・・酷いな。せつかく助けてあげたのに。」

士「それは・・・感謝してる。でももう俺と関わるな。俺と関われば・・・死ぬかもしれないんだぞ？俺が・・・俺が破壊者である限り・・・！俺は海東とは鬪いたくない。」

『破壊者』。

この言葉はもともとそんなに強くない士の心を傷つけてきた。

「それがデイクイドの宿命。デイクイドの役目。」そう言ってしまうえば早いのもかもしれない。

だけど海東は言えなかった。目の前の、今にも崩れ落ちそんな人間の前では絶対に。

海東「忘れたのかい？僕は士の邪魔をするつて。」

士「海東！！ふざけるな！！何処行くんだ！！！」

海東「（ああ、やっぱり僕は変わった。少し前の僕はこんなにも人と関わることなんてなかったのに・・・。だけど今の僕は・・・。）

」

海東「ちよつとこのあたりを散策してくるよ。士はここで待っていてくれたまえ」

士「・・・っ・・・！！」

海東「（今の僕は士のためならどんなことでもする・・・そんなふうに思ってるようだ。・・・僕の質が下がったのかな。）」

海東が士から少し離れた場所で突然足をとめた。

海東「鳴滝さん。あなたのいいなりにはならないよ。あの時の惨劇をまた起こすわけにはいかないんだ。・・・そろそろ絞めとかない

といけないね、君のその計画を。それが僕の役目さ！」

T o b e c o n t i n u e . . .

第二話 海東と土（後書き）

ちよつと長くなつてしまいました。

そしてわかりにくいです（爆

うーん…土と海東との絡みが本編では

随所随所あつたんですけど、そこまで

深くは掘り下げてくれなかつたんですね。

だから結局のところ、海東がなぜ土のことを

突然「仲間」と言い出したのかわからないんです（笑

だけど、無理やりここではあてはめてみました。

やっぱり日本語がおかしいですね、ごめんなさい。

もつと精進します！

感想・評価などばちばちお願いします！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第三話 本当の破壊者・・・？（前書き）

今回はUクウガVSディエンドの闘いシーンがあります！

戦闘シーンの描写はほんとに苦手なので、目をつぶっていただけると嬉しいです（笑 あとは、鳴滝とキバーラが夏海に本当のこと（？）を話す場面です。

士は登場しません。すみません（笑

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

夏海「・・・ここはどこですか？」

鳴滝「・・・ネガの世界だ。」

夏海「・・・ネガの世界・・・?!」

夏海は戸惑った。

この世界は確か人間がいてはいけない世界なのでは？と。

キバーラ「安心して、夏海ちゃん。彼らはここにはいないわー。かわりにこの子がいるの。」

夏海「・・・！あ、あなたは・・・！！」

??「・・・久しぶりですね。」

ネガの世界で出会った、自分と同じ顔を持つ女性。（通称「ネガ夏海」と呼ばせていただく）

ぼろぼろの服に、ライフル銃を持っていた。

夏海「・・・どうしてあなたがここに？」

ネガ夏海「・・・ディケイドを倒すためです。」

夏海「そ、そんな・・・！なぜあなたがそんなことを？」

鳴滝「ディケイドを倒さなければ、全ての世界が破壊されるからだ！」

夏海「・・・本当のことって・・・結局いつものことじゃないですか・・・。」

キバーラ「違うのよ、夏海ちゃん。」

キバーラが普段よりトーンを落として夏海に話しかける。

夏海は顔をこわばらせた。

キバーラ「ディケイドをとめられるのはあなた達しかない・・・。」

ディケイドがいることですべてのライダー、いや、全ての人間が消えてしまうのよ。」

夏海「すべての人間が・・・？」

鳴滝「そうだ。人間は勿論、世界そのものが消える！仲間も・・・町も・・・すべて、だ。」

ネガ夏海「今はこんな世界になってしまいましたけど、やっぱりここは私の世界です。私は世界を守りたい。だから・・・私がディケイドを倒す！！」

ネガ夏海の決心は固かった。夏海のように揺らがない。もう覚悟を決めているのだ。

鳴滝「夏海くん。世界を救いたいとは思わないのか？・・・君の力ですべての世界が、全ての人間が救われるのだ！」

夏海「（・・・でも・・・。土くんを倒すだなんて・・・）やっぱり私にはできません！土くんを倒すことも・・・土くんのことを破壊者だっと思うことも・・・。ちゃんとした理由を聞かない限り納得できません。」

鳴滝「・・・いいだろう。理由はちゃんとあるからな。」

夏海「・・・。教えてください。」

海東の目の前には小野寺ユウスケが立っていた。

殺気立っているユウスケに対し、海東は普段通りだった。

海東「やあ、究極の闇くん。何をそんなに殺気立っているんだい？」

闇ユウスケ「うるさい。そこをどけ！俺が世界をもらう。ディケイドは俺が倒す。」

海東「ふっ。士は究極のお宝なんだ。士に触れるものは僕が許さないよ。」

闇ユウスケ「・・・おとなしくすれば命だけは救ってやったのにな。」

海東「君ごときに僕を倒すことはできないさ。」

闇ユウスケ「それはどうだろうな。今のおれは最強だ！お前なんざ痛くもかゆくない。・・・変身。」

ユウスケはウクウガに変身した。

海東「・・・やっぱりこうなるのか。しょうがない。」

「KAMEN RIDER!!」 海東「変身！」 「DE、END
!!!」

DED「じゃあまずはこっちからいくよ！」

「KAMEN RIDER OHJA! IXA!」

王蛇「祭りの場所はここかあ？」 イクサ「その命、神に返しなさい！」

DED「それじゃ、いつておいで」

ウクウガ「俺相手に2体で足りるのか？海東。ウオオー!!」

ウクウガは思いっきり走り出すと、王蛇のボディへと駆け寄りパンチをくらわせた。

王蛇「グアアア・・・！」

するとどうだろう。一瞬のうちに王蛇が倒されてしまったではない

か。

DED「……あの王蛇を一発で……？どんな力を秘めているんだ？」

？「俺、ここから抜けるわ。なんかめんどくさくなってきたぜ」
？「ほんと乾さん、素直じゃないんだから。あ、僕たち門矢さんが『本当の破壊者』とは思えないんですよ。なので別行動させてもらいます。」

一触即発

剣崎「お前ら……何言ってるんだ？！デイケイドを倒さなければ俺らの世界は救われないんだぞ？！」

？「剣崎。一度消滅した世界をなぜ元通りに出来るんだ？そこから間違ってるんだ、お前は。……バカだからしょうがないのか。」
剣崎「なんだと？！乾、もう一回言ってみろ！」

乾「何度も言ってるよ。バカだってな。」

？「……渡さん。」

渡「剣崎さんも乾さんもやめてください！今は喧嘩をしている場合ではありません。仲間割れしている余裕もないんです。一刻も早くデイケイドを見つけ出して、倒さなければいけないんです。」

ここはライダー8人が集まる場所。

今はこれからのことを会議していた。

だが、いきなり乾巧（仮面ライダー555に変身するもの）と津上翔一（仮面ライダーアギトに変身するもの）が抜ける、と言い出し

ただ。

剣崎「『本当の破壊者』・・・だと？どういうことなんだ、津上。」
津上「それを教えるわけにはいきませんよ。だってそれを教えたら今の剣崎さんに気の毒ですしね。」

剣崎「なんだって?!」

???「まあまあそのくらいにしといたら？抜きたい奴は抜ければいい。それでいいじゃないの？」

剣崎「ヒビキさんがでてくるとめんどくさくなるので、出てこないでくださいよ」

ヒビキ「ひどいなあ・・・ハハハ」

???「本当の破壊者であれ、ディケイドを倒さなければ全世界が消滅される。世界の中心にいる俺がそんなことはさせない。俺がディケイドを倒す。」

???「お前、やっぱりむかつくぞ！その言い方やめろよな!!」

8人ライダー側にもいろいろいるようだ。

とにかくディケイドを倒すべきだ、と主張するもの。

まずは傍観が一番だ、と考えているもの。

「本当の破壊者」を見つけるべきだ、と主張するもの・・・。

乾「お前ら、もういつペン考え直した方がいいぞ。ディケイドが正気を失う前にな・・・」

鳴滝「今のディケイドライバーには制御装置がある。」

夏海「え？」

鳴滝「破壊者としての活動を抑えるための、だ。」

夏海「・・・じゃあそれがあるから今は大丈夫ってことなんですか？」

キバーラ「・・・もう壊れてるのよ。」

夏海「・・・そんな・・・！！」

じゃあ・・・もう手遅れってことなんですか・・・？

鳴滝「・・・夏海くん。やってくれるね？」

夏海「・・・私は・・・。」

To be Continue...

第三話 本当の破壊者・・・？（後書き）

文章が・・・おかしい！！（爆

それも全然戦闘シーンがなくてすみませんでした><;
次回はたくさんできますし、ちゃんと土も登場させます！

・・・「本当の破壊者」とはなんのことなのでしょう？
次回をお楽しみに！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第四話 小野寺ユウスケ（前書き）

とうとう始まったUクウガVSディエンド。

王蛇を拳一発で消滅させたUクウガを見て、冷や汗をかく海東。
はたして戦いの行方はいかに？！

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第四話 小野寺ユウスケ

海東は目の前のウクウガに首を絞められていた。

イクサも消滅に追い込まれ、ディエンドが気を休めているほんの瞬間のうちに、ウクウガは彼に向って突撃してきた。海東はよけることも攻撃を仕掛けることもできなかった。その間にディエンドライバーまで奪われてしまったのだ。

DED「くう!!...っあ!!」

ウクウガ「ウアアアアアアアアア!!!!」

ディエンドは変身を解除され、その場に倒れこんだ。

海東「(.....くそ...潮時なのか...僕の旅は...!)」

ユウスケは深い闇の中で目が覚めた。

ユウスケ「ここはどこだろう...」

自分はアポロガイストの攻撃を浴び、死んだはずだった。

ユウスケ「そっか。ここは地獄なのか...俺、天国には行けなかったんだなあ...ハハハ!」

開き直ったように見えるが、目にはうつすらと涙を浮かべている。

ユウスケ「俺・・・ちゃんと土を守れたんだよな。だったら地獄でも・・・いいよな！」

ふと視線を落とすと、自分の掌が真つ赤に染まっていた。

ユウスケ「な、なんだよこれ！！なんで・・・なんで真つ赤に染まってるんだよ・・・。俺・・・誰かをまた倒してしまったのか・・・？また・・・また笑顔を守れなかったのか・・・？土を守れた気でいたのは・・・間違ってたってことなのか・・・？・・・俺・・・これからどうすればいいんだよ・・・グスツ・・・！」

??「泣かないください。あなたに涙は似合いませんよ」

ユウスケ「・・・だ、誰ですか？」

??「名乗る者でもありませんよ。2009個の技をもつもの、つてことにしておきましょうか。ハハハ！」

目の前の男は笑っている。ユウスケはその笑顔にくぎ付けになっていた。

??「僕もね、今の君みたいな時があっただんです。一生笑顔を取り戻せなくなるような出来事があって・・・。自分の掌は真つ赤だし・・・それをちゃんと元の自分に戻すために旅をまた再開したんです。何年もたった後ちゃんと元に戻りました。・・・でも。小野寺さんにはすぐにでも戻ってもらわなければいけないと思うんですよ。」

ユウスケ「・・・な、なんで・・・なんで何も知らないあんたに言われなければいけないんだ！！そんなこと・・・そんなこと言われたって何の慰めにもならないし、・・・俺はもう・・・」

??「単刀直入に言います。あなたの仲間である門矢士さんが危険です。」

ユウスケ「・・・え・・・」

??「・・・あなたの役目を思い出してください。」
ユウスケ「俺の役目・・・？」

八代「世界中の人の笑顔のためだったら、あなたはもっと強くなれる。」

士「こいつが人の笑顔を守るなら、俺はこいつの笑顔を守る!!」

ユウスケ「俺の役目は・・・俺のすべきことは・・・世界中の人の笑顔を守ることだ・・・」

ユウスケがそういうと、目の前にいる男性はほほ笑んだ。

??「なら大丈夫!この真っ赤な掌だつてすぐに元通りになります!門矢士さんの笑顔を守つてあげてください。」

ユウスケ「・・・本当にこんな俺でも・・・士の笑顔を守れるのかな・・・」

??「大丈夫ですつて!俺が大丈夫って言ってるんだから、俺と同じ君ならなおさら!!」

ユウスケ「・・・同じ・・・?それってどういう・・・」

??「時間がありません。今すぐここから抜け出しましょう。」

ユウスケ「・・・はい。」

ユウスケが目覚ますと、目の前に血まみれの海東が倒れていた。

ユウスケ「……まさか俺は海東を……？」

海東「……ようやく正気に戻ったか、小野寺くん……」

ユウスケ「……俺は……一体何を……！！！！」

海東「……僕のことは気にするな。君は今まで自我がなかったんだ。仕方ないさ。弱い僕が悪い。」

ユウスケ「何言ってるんだ！はやく……はやく病院へ！！！！」

海東「僕のことには気にするなと言ってるだろう？！！……はやく土のもとへいってやってくれないか。今の君ならきつと倒せるはずさ。」

ユウスケ「何バカなこと言ってるんだよ……海東を置いてなんて……そんなの無理だ！！それに何を倒すんだよ……！意味わかんないよ！！」

海東「……僕はもうここで君たちの邪魔をしに行くのをやめよう。そろそろ違う旅もしたくなっただしね。」

ユウスケの目の前にオーロラが現れた。

ユウスケ「……海東。土は俺が守る。だからはやく追いついてこいよ！」

ユウスケが走り出し、その場には海東だけが残った。

砂浜をふらふらと歩く海東。

海東「……鳴滝さん。あなたの思い通りにはいかないようだ。」

その場に崩れる海東……。

海東「・・・土・・・死ぬな・・・！」

土は乾と津上に出くわしていた。

土「・・・お前ら。ライダーだろ。」

津上「はい。僕がアギトで乾さんが555です。」

土「・・・俺を倒しに来たのか・・・それなら受けて立つぜ。」

津上「乾さんは無愛想ですからねー、勘違いされやすいんですよー。」

乾「お前はへらへらしすぎなんだよ。」

土「・・・じゃあ何しに来たんだよ、お前ら。」

津上「土さんの傷を治してきました！」

土「・・・何言ってるんだよ。お前らは俺の敵じゃないのか？」

乾「お前に話しておきたいことがある。」

土「話しておきたいこと？なんだそれは。」

津上「『本当の破壊者』のことです。」

土「本当の破壊者だと?？」

To be continue...

第四話 小野寺ユウスケ（後書き）

次回は土に本当の破壊者の情報が話されます！
鳴滝とキバーラの目的も明らかに・・・??

お楽しみに!!

全てを破壊し、全てを繋げ!!

第五話 鳴滝の正体（前書き）

最近お気に入り数が増えて、若干浮かれ気味の水城ですが、もっといいものが書けるよう、日々精進していきたいと思っております。これからもよろしく願いいたします！！

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第五話 鳴滝の正体

話は門矢士が旅を始める日より前にさかのぼる。

世界はやはり終結を迎えていた。

だが、それを自分の命と引き換えに破壊した人物がいた。それが、「本当の破壊者」ディケイドである。

そのディケイドはただ世界を救いたいという思い一心でライダーを破壊した。

その方法が正しかったのか、今となってはわからない。

彼は自分の命を投げ出してまでも、救いたかったのだ。世界を、仮面ライダーを、仲間を。

だが、結局その想いもむなしく世界は破壊された。彼の仲間もほとんどが巻き込まれ死んでいった。

最後まで自分を信じてくれた……『夏海』も……。

士「待て、ナツミカンがなんでここで出てくるんだ？」

乾「もう少し話を聞けよ。」

士「いや、教えてくれ。なぜここで夏海が出てくるんだ。」

津上「……あなたの知っている夏海さんでもあり、知らない夏海さんでもある、ということです。」

士「……意味がわからねえ……。」

乾「話をつづけるぞ。」

そいつは今でも恨んでいる。世界の破壊者ディケイドを。ディケイドという存在を。

仲間を失い、自分自身も失った。今の彼に残っているものは何もな

い。ただディケイドを倒すこと、それだけを求めている。それが今の彼の・・・役目だ。

今、俺達8人のライダーは今のディケイドを倒そうとしている。まだ「破壊者」として目覚めていないうちに倒しておこうっていう魂胆らしい。

・・・だが、俺はそれが正しいと思えないんだ。同じライダーをこんな簡単に倒していいのか、そんなの考えたって答えなんかでないだけだな。

だから俺ら2人はそこから抜けてきた。お前に「本当の破壊者」を倒してもらうために・・・いろいろ情報も持ってきた。俺らだけじゃ物足りねえかもしれねえが、我慢してくれ。

津上「乾さん、今日は素直にいろいろ話してるんですね!。」

乾「うるさい。今はこいつにわかってもらうのが先決だろうが!。」

士「・・・お前らが敵ではないことはわかった。だが、その『本当の破壊者』って誰なんだ? お前らは知ってるんだろ?。」

乾「ああ。そいつはお前もよく知ってるやつだよ。今の姿を見ていたら全然そんな感じがしないかもしれないがな。」

士「・・・大体わかった。」

鳴滝は汚れたカメラを取り出した。

鳴滝「・・・懐かしいな。」

ボソツと呟く鳴滝の前に現れるキバーラ。

キバーラはそんな鳴滝を見て、クスツと笑うと鳴滝に近付いていっ

た。

キバーラ「鳴滝さん？そのカメラはもう封印したはずじゃなかったかしら？」

鳴滝「キ、キバーラ！！！！」

キバーラ「あなたがまだ”生きていた頃”のことを思い出すことがあるのは知っていたわ。」

鳴滝「ふっ。私もまだまだだ、ということだ。」

キバーラ「……。夏海ちゃんのこと、後悔してないの？」

鳴滝「……。何を言っている。ディケイドをとめることができるのは彼女だけだ。」

キバーラ「だって……。あなた……」

鳴滝「キバーラ。私に昔のことをそんなに思い出させたいのか！！」
キバーラ「ごめんなさい。」

反省の色がないキバーラを見てイラつかせる鳴滝。

オーロラの向こうには乾と津上が土と接触しているところが見えていた。

鳴滝「……。ディケイド。お前は倒されなければならんだ。それが……。世界を救ったひとつの方法なんだ……。！！」

キバーラ「じゃあ、アタシは夏海ちゃんの所へ行くわよ？鳴滝さんもまたあとでね」

鳴滝「……。ああ。」

夏海は走っていた。

勿論目的を果たすためだ。

夏海「（はやくしないと、ディケイドが世界を破壊してしまう・・・！）」

夏海自身、まだ迷っていた。

本当に士を倒すべきなのか。そんな質問に答えられる人なんてないだろう。

ディケイドが破壊者であることは重々わかってるつもりだ。だけど、士くんを破壊者と呼ぶのに憚っていたのだ。

すると夏海の目の前にディケイドとウクウガの戦闘が見えていた。

夏海「・・・そんな。ユウスケ・・・？士くん・・・？」

夏海は夢で見たような場面を現実で見てしまった。

D C D「ウアアアアアアアアアア！！！」

ウクウガ「ハアアアアアアアアア！！！」

大きな爆発が起こり、夏海はその場にしゃがみこんだ。爆発がおさまり恐る恐る目を開けると、手をはらうディケイドのみが立っていた。

夏海「・・・ディケイド。」

彼女の瞳は何かを決心したような視線をディケイドに送っていた。それにディケイドは気付かない。

夏海「ディケイドは私が倒す。」

ユウスケは土と夏海を探していた。

ユウスケ「・・・土・・・夏海ちゃん・・・どこだよ!!」

愛用のバイクに乗り、2人を探しているといきなり人影が見えた。

ユウスケ「うわ!!!!・・・おい!!!!危ないじゃないか!!!!」

剣崎「・・・正気に戻ったってのは本当だったようだな。仮面ライダークウガ。」

ユウスケ「・・・お前は・・・!剣崎一真!!!!!!」

ユウスケは剣崎をにらんでいる。

剣崎はその視線をニヤツと笑いながらうけとめていた。

剣崎「・・・ディケイドの肩をもつものは、倒すのみ。」

ユウスケ「・・・俺だって。お前を倒してやる!!変身!!!!!!!!」

ユウスケは赤い眼をしたUクウガに変身した。

剣崎は仮面ライダーブレイドキングフォームへと変身した。

ここに、仮面ライダークウガVS仮面ライダーブレイドの戦いが幕を開ける!!

T o b e c o n t i n u e ..

第五話 鳴滝の正体（後書き）

鳴滝の正体はわかりましたかね？

これからもっともっとわかりやすくなってくると思われます。
次回は主にユウスケVS剣崎になります！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第六話 パラレルワールドと原典世界（前書き）

鳴滝の素性が少しずつ明らかになっている中での、この内容。ただ、この内容は今後の展開に必要なので、いれてみました。主はユウスケVS剣崎一真だったりしますが・・・。Uクウガ VS K剣の戦い・・・どうなるのか、自分でも楽しみです（爆 まあ大方予想はつきますよね。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第六話 パラレルワールドと原典世界

お前のよく知る光夏海という女は、以前のライダー大戦のときにも存在している。お前が知っている姿のままな。だが同じ人間ではないことは確かなんだ。だってあのとき彼女は・・・

士「なんだよ・・・ナツミカンはそのときどうなったんだ？」

乾「・・・ディケイドの戦いに巻き込まれて死んだ。」

士「・・・なんだと？」

津上「正確に言えば、ディケイドを庇って死んでいった、が正しいかもしれないね。」

士「・・・夏海が・・・。」

俺らもそのときのライダー大戦に参加している。だから・・・彼女を再び見たとき驚いたんだ。彼女もパラレルワールドの一員だったのか、とな。

士「パラレルワールドだと？」

乾「ああ。お前らがめぐった世界はすべて俺らのパラレルワールドにすぎない。だから最終形態にもなれない、というわけだ。お前の仲間のライダーは俺ら、原典ライダーには敵わないというわけさ。」

津上「あなたにはコンプリートフォームになる力がありましたよね？」

士「ああ。これだろ？」

士は乾と津上に見せる。

津上「はい、そうです。あなたがめぐった世界が消滅に向かってい

る今……。その力が完璧に使えろとは言切れないんです。」

士「な、なんだと？」

乾「ライダー自体が消滅してしまったんだからな。だが……。妙なことがある。」

士「……。ユウスケのことだろ？」

乾「ああ。あいつもパラレルワールドの人間のはずだ。だったら消滅するはずなのに……」

津上「小野寺さん、五代さんによって救われてるといいんですけど……。」

士「五代？そいつがユウスケの……。クウガのライダーなのか？」

津上「ええ。僕たちライダーの中で一番強いんです。」

士が津上や乾と話しているころ、ユウスケは剣崎と戦っていた。

ユウスケ「（くそ、どんだけ力強いんだよ！！こんなくらったら最悪だ……。！）」

K 剣「よそ見していいのか！！ウェイ！！！」

U クウガ「うう！」

ユウスケは剣崎の攻撃をくらい、膝をついてしまった。

K 剣「究極の力と聞いていたが……。やはりパラレルワールドの力。偽者の力は弱いな。」

U クウガ「偽者だと？！俺は……。俺は本物のクウガだ！！！！おりゃあああ！！！」

ユウスケは腕に力をこめて、剣崎の腹を殴った。

K 剣「うああ!!・・・ちつ。なかなかいいパンチだな。だが俺には効かない」

U クウガ「どうかな!!きっちり士の仇、とらしてもらっぜ!!
!おりゃ!!」

やみくもに殴っているが、攻撃はすべてかわされてしまった。

K 剣「・・・そろそろ疲れてきただろ？」

U クウガ「まだまだだっ!!!!・・・ハアハア・・・!!!」

K 剣「とどめだ。」

「スピードテン!ジャック!クイーン!キング!エース!

ロイヤルストレートフラッシュ!!」

K 剣「ハアアア!!ウエエイ!!!!!!」

U クウガ「(くそ、逃げ切れない!!!!)」

「ドカアアアアアアアア!!」

K 剣「・・・?!」

U クウガ「ハアハアハアハア・・・まだ・・・まだ・・・だぜ・・・!!」

K 剣「あの攻撃をまともに当たったくせに・・・なんで倒れていないんだ？」

U クウガ「・・・俺はクウガだから・・・。」

K 剣「・・・、今日のところはこれで勘弁してやる。次にあったと

きは必ず倒す。」

ウクウガ「あ、おい！待てよ！！！！！」

ユウスケだけ取り残された。

剣崎に対しては強気の状態をとっていたが、彼の体はもうぼろぼろだった。

ユウスケ「ハア・・・さすがに・・・きついなあ・・・。」

ユウスケはそのまま倒れこみ、目を閉じた・・・。

士「じゃあ、夏海はそのときのディケイドと一緒に旅をしていたってことなのか？」

津上「はい、そうです。」

士「そのときも9つの世界をめぐるって？」

乾「やっていたことはお前と同じだ。ライダーを破壊しなければならなかったところを仲間にしてしまったところもな。・・・当然といえば当然だが。」

士「・・・なぜだ？」

乾「・・・そのうちわかる。そのディケイドを対峙したときにな。」

士は首をかしげた。

「偶然」ではなく「当然」と言った点である。

しかし、彼らはまだそこを教えてはくれないようだった。

津上「とりあえず、僕たちは一度向こうに合流するつもりです。な

ので、士さんはここで待っていてください。」

士「合流って・・・お前ら仲違いしたんじゃないのか？」

乾「俺らの立場の人間もほかにいる、ってことだよ。」

士「・・・結構なことだ。向こうにいたほうが狙われなくてもすむっていうのに。」

士はこう言っているが、内心はすごくうれしかった。

一人でも多くの仲間がいたほうが、戦いするときもやりやすいと考えているからだ。

何より、「仲間」の大切さをこのたびで知った士は、新しい仲間ができることに多少の喜びを感じていたのだ。自分では本音を出していないつもりでも、津上にはわかっていた。

津上「ほんと、こういうところって乾さんに似てるんですねー。」

乾「は？なんで俺が出てくるんだよー！！」

津上「いや、なんでもないです。（本人に言ったら絶対に否定されるでしょうけど）」

津上「それでは、行ってきますね。しっかり体を休めてください。」

乾「お前の仲間も一応探してきてやるよ。」

士「特に夏海とユウスケだ。海東は・・・まあ大丈夫だろ。」

津上「（やっぱり士さんは素直じゃないなあ・・・）」

こうして津上と乾は仲間のところへ合流するために出て行った。

士「しかし・・・本当に鳴滝がディケイドなのか？だったらなんでディケイドを恨んでいるんだ？皆目見当がつかん・・・」

鳴滝「直接教えてやろうか。」

士「な、鳴滝！！！！！！」

鳴滝「久しぶりだな、デイケイド。お前にひとついいことを教えてやろうと思ってな。」

士「いいことだと？断る！お前にとってのいいことは、俺にとっては悪いことしかないからな。」

睨んでいる士を見て、ニヤツと笑った鳴滝は奇妙なことを言い出していた。

鳴滝「確かに私はデイケイドだった。それは正しい。そして今でも私はデイケイドを恨み続けている。それも変わらない。だが、お前らには決定的な勘違いがひとつだけある。」

士「勘違い・・・だと？」

鳴滝「私はデイケイドとして・・・本当の破壊者デイケイドを倒す。それが私の目的なのだ。」

士「・・・何言ってるんだ？」

鳴滝「・・・本当の破壊者は・・・お前だ。」

鳴滝は士に向かって指を指した。

士は鳴滝が言ったことに対して動揺を隠せない。

士「何を言ってる・・・？」

鳴滝「お前は・・・私だ。」

士「・・・なんだと？どういうことだ！！ちゃんと説明しやがれ！！」

鳴滝「とうとう私の正体を明かすときが来たようだ。」

鳴滝は士が持っているカメラと同じものを取りだし、自分の腰近くへと持っていく。

するとどうだろう。

カメラだったものが、デイケイドライバーと類似するものになっ

たではないか。

士「……………どういうことだ……………？お前……………！！！！！！！！」

目の前にいた鳴滝は……………士そっくりの姿へと変貌していた……………

鳴滝ver.士(N士)「……………変身。」

「カメンライド！ファイナルディケイド！」

To be continue…

第六話 パラレルワールドと原典世界（後書き）

こんな序盤に彼の姿をさらけ出しているのか！って心配になった方もいるかもしれないですけど、あくまでも序盤なので。N士はものすごく強いです。とりあえず今の士には敵いつこないほど強いです。

ちょっとだけN士のディケイドの説明をさせていただきますと、

仮面ライダーファイナルディケイド：鳴滝ver.の士が変身した姿。

カメンライドしなくてもほかのライダーの技を使うことができ、ディケイド激情態の3倍もの力を発揮。ディケイドの最終形態である。

こんな感じでいきます。設定変更があったらそのつどお話します。

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第七話 デイクイドVSファイナルデイクイド（前書き）

- ・士はまだ完全に傷は癒えていません。
- ・士は他のライダーに変身することができません（クウガ以外）。
- ・とりあえず鳴滝ver.士（N士、FDCDと表記）は最強。
- ・N士の攻撃はカタカナ表記、士の攻撃は英語表記

世界の破壊者デイクイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第七話 デイケイドVSファイナルデイケイド

デイケイドとFデイケイドの闘いが始まっていた。

FDCD「今のお前に戦う力はない。」

DCD「どういうことだ？」

FDCD「カードを見ればわかるぜ。」

士は啞然とした。

デイケイドのカードとクウガのカード以外が使えなくなっているのだ。

DCD「なぜ、こうなってるんだ？・・・世界が消滅したからか・・・？」

FDCD「そのとおり。だからお前は俺に勝つことはできない。」

デイケイドとクウガのカードしかない士にとって、闘いを長引かせるのは危険。

何のカードを持っているかわからないうちは、様子を見ることにした。

・・・のだが、N士の動きは余りにも速かった。

FDCD「デイケイド。お前はここで終わりだ。」

「ファイナルフォームライド ブレイド！」

DCD「（なぜブレイドがないのにできるんだ?!）」

FDCD「これがファイナルデイケイドの力だ。ハアアアアアア
！！！！」

「ファイナルアタックライド、ブレイド!!」

N士はディケイドにむかつて走ってきていた。

士は必死に防御策を探すが、なかなかでてこない。

DCD「ちっ!」

「ATTACK RIDE BLAST!!!」

FDCD「そんな攻撃、無駄だあ!!!!!!」

ディケイドはまともにファイナルディケイドの攻撃を受けてしまう。その攻撃をもろに受けたディケイドは、体ごと跳ね返されてしまった。

DCD「ぐうああ・・・!!!!!!」

体中が痛む。立ち上がろうとするが、立ち上がれない。

自分の攻撃が効かない…彼は自分だと言った…その言葉が頭から離れない。

士は焦っていた。それと同時に動揺していた。

N士に迷いなどない。本気で士を倒そうとしている。

士「（俺は…弱い。）」

先ほどの闘いで負った、ディケイドの古傷に気づいたファイナルディケイドは、仮面の中でニヤツと笑った。未だにうまく立ち上がれない士を見て、またにやりと笑う。

FDCD「・・・もう終わりなのか?はやいな。」

DCD「ちっ……！まだ……まだだ！！……うつ！！」

FDCD「何を焦ってる？お前は……ただ目の前の敵を破壊すればいいだけだ。それがお前の役目だ。お前は『破壊者』なんだぞ……？」

DCD「俺は……『破壊者』……。」

FDCD「そうだ。本気で来い。本気で来てこそ本当の闘いというものだ。」

「ファイナルフォームライド ヒビキ！！」

ファイナルディケイドはヒビキアカネタカにつかまり、空へ飛び立った。

DCD「そんなのありかよ！！ちっ！！」

「KAMEN RIDE KUUGA」 「FORM RIDE KUUGA - PEGASASS」

FDCD「これで終わりにしてやろう。」

「ファイナルフォームライド ファイズ！」

「ファイナルアタックライド ファイズ！！」

「FINAL ATTACK RIDE KUUGA！！」

ファイナルディケイドはディケイドの攻撃を軽々とよけると、ディケイドに攻撃をくらわした。

D C D「うあああああ!!!!!!」

ディケイドは攻撃をくらい、吹っ飛んだ。
そのまま崖から落ちて行つた……。

N士「……これで俺の役目も終わる。」

剣崎「……久しぶりだな、ファイナルD。」

N士「剣崎か。お前の果たさねばならないことはこの俺が果たして
やったぞ。感謝しな。」

剣崎「門矢。俺はまたわからなくなってきたいるんだ。」

N士「何をだ。」

剣崎「お前を倒すべきだったのか、とな。」

渡が土を探していると、誰かが倒れている姿が見えた。

渡「……あれはまさか。……土さん……!」

体中ぼろぼろで息も絶え絶えしかった。

渡「一体誰が……?……まさか。『あの人』が復活したということ……ですか……。」

キバット「渡、どうするんだ?こいつだってディケイドなんだろう?
放置するつもりか?」

渡「・・・キバット。今まで僕がしてきたことは間違っていたんだ
ろうか。」

キバット「渡・・・。」

渡「とりあえず、土さんを城へ運ぶ。そこから・・・考えるよ。」

キバット「・・・一人で運べるのか？ 渡は細いからなあ・・・。」

渡が土の体に触れた瞬間、土が一つ、言葉を発した。

土「・・・な、夏海・・・。」

T o b e C o n t i n u e . . .

第七話 デイクイドVSファイナルデイクイド（後書き）

あれ、全然戦闘シーンがない（汗
戦闘シーンの書き方がわかりません。ぜひアドバイスをお願いしま
す><；

次回は土は空気です。

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第八話 夏海の『夢』のつながり（前書き）

- ・土は空気
- ・原点世界のライダーメインな感じ
- ・ヒビキは安定剤
- ・良太郎は剣崎のおもちや
- ・夏海が久々に目立ちます。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第八話 夏海の『夢』のつながり

剣崎は苛々していた。

先ほどのN士の言葉を思い出していたからだ。

N士『本当の破壊者は俺じゃない。そして奴でもない。』

剣崎『なに?! だったら誰なんだ!!』

N士『まあ、そう焦るなよ。奴の制御装置は破壊されているのは本当だ。だが、破壊者は別にいる。俺を倒すのはおかしい話だぜ?』

剣崎『お前はいつまでその姿でいられるんだ?』

N士『そうだな・・・もって1週間つてとか。』

剣崎『・・・じゃあ。その破壊者とは誰なんだ?』

N士『・・・それはまだ教えられない。すまん。』

彼の言葉がすべて正しいとは言えないかもしれないが、今はそれを信じるしかない。それはわかってる。それでも剣崎は苛々を隠せなかった。そのせいで先ほど野上にやつあたりをしてしまった・・・大人げない。(当の本人には笑って「そういう役回りですから」と言われてしまった。)

剣崎「ああ! くそ!!」

天道「何を苛々しているんだ?」

剣崎「天道か。いや、なんでもない。」

天道「そういえば・・・。紅がディケイドを連れて城に戻ってきたぞ。どういうことなんだ?」

剣崎「なんだって?! (ファイナルDがやったってことか?) どこにいる?!」

天道「そこまではわからない。あと津上と乾もいたぞ。結局は戻っ

てきたというわけだ。」

剣崎「・・・ちつ。」

剣崎の苛々はまだ続きそうだ。

津上「士さん、結局その場を離れたってことですかぁ・・・。渡さん、士さんの容体は？」

渡「心底いいとは言えませんが。ただ命に別条はないみたいですが・・・。」

乾「鳴滝。行動が早いな。」

津上「そのようですね。」

渡は疑問を抱いていた。なぜ離れたこの二人がまた戻ってきているのか。

渡「そういえば。なぜあなたたちがここに？」

乾「戦況が変わってきている。それを伝えに来ただけだ。」

渡「戦況が？それってどういう・・・。」

剣崎「渡！！！！」

剣崎がすごい剣幕で部屋に入ってきた。その後ろからは、その足音で何事かと思ったのか、野上とヒビキと城戸もいた。天道はゆっくりと近づいてきている。

剣崎「お前、なんでディケイドをここに連れてきたんだ！」

渡「一刻を争う状態の人間を見たとき、あなたは放置することができんですか？」

剣崎「相手を考えろ！相手はディケイドだぞ・・・。」

渡「そういえば、津上さんと乾さんはなぜここへ？」

乾「実は妙な噂を聞いたんだ。」

野上「妙な噂？」

乾「ああ。鳴滝とキバーラが光夏海に何か余計なことを吹き込んだらしい。」

ヒビキ「余計なこと？」

乾「風の噂だから正しいかどうかはわからないけどな。」

渡は少し考え込むと、乾に向かって話しだした。

渡「そうですね・・・。それとひとつ尋ねたいことがあるんです。いいですか？」

乾「俺が答えられることならな。」

渡「二人きりで話したいんです。」

ヒビキ「また俺らに隠し事ー？そろそろおじさんにも話してよ、渡くん！」

渡「すみません。ヒビキさん。ちゃんとした答えがわかり次第話しますから。」

渡と乾が部屋を出て行った。

城戸と天道の言い争いは終了したようだ。（最も城戸が天道に勝つことはまずないので、城戸が放棄したのだろう）

部屋には重苦しい空気が流れていた。

夏海「またあの夢。最近よく見る気が・・・。どうして？」

夏海はまたあの夢を見た。

ライダー大戦の夢。最終的にディケイドだけ勝ち残るあの夢。

夏海「私はディケイドを倒す。なのに。」

肝心の土が見つからないのだ。

そしてユウスケや海東までも。

夏海「ここは元いた世界じゃないんでしょうか……。」

すると後方で大きな爆発音が聞こえた。

その方向に夏海が視線を移すと、愕然とした。

夏海「……ライダー大戦。」

数多くのライダーが一方の攻撃によって吹き飛んでいく。

その視線の先には……

ナツミ「……ディケイド。」

夏海「え……?!」

夏海の目の前には、『夏海』が薄汚れた白いドレスを着て立っていた。

夏海「どうして私が……なんで？」

その『夏海』は夏海が後ろにいることに気づいていないようだ。いや、気づいていないのではない。『夏海』にはそこには何も無いように映っているからなのである。

そう。これはまだ夏海の夢の世界。そして夏海が昔経験したライド
―大戦の世界。

鳴滝「夏海くん。」

夏海「鳴滝さん?!これは・・・これは一体・・・?」

鳴滝「彼女は君であつて君ではない。だがこれは君が経験したものであることに間違いないんだ。」

夏海「そんな・・・でも私にそんな記憶は・・・!!」

鳴滝「君がよく見る夢がその記憶だ。」

夏海「・・・?!」

鳴滝「さあ夏海くん。ディケイドを止めてくれ。」

夏海「この世界のディケイドを・・・ですか?」

鳴滝「いや。この世界のディケイドはもういない。そしてこの世界の『夏海くん』もまたいない。君がよく知るディケイドを、だよ。」

夏海「わかりました。私がディケイドを・・・土くんをとめてみせます。またこんなこと起きてほしくありません・・・!」

N士「・・・これでいい。これで奴が俺と同じ思いをしなくても済む・・・。これで・・・。」

T
o

b
e

c
o
n
t
i
n
u
e
...

第八話 夏海の『夢』のつながり（後書き）

第八話。いかがでしたでしょうか？

まだまだ伏線。そして主人公が空気！

こんな扱いしていたら士に怒られますね・・・

海東「士はまだ目立ってるからいいよ。僕なんてすぐ

倒されたんだからね。君にはもう興味はない。」

水城「あ、大樹！！いやあ、君にはそうしてもらわないと

次に進めないんだよ・・・」

ユウスケ「俺なんて海東を…この手で…」

水城「それは設定上仕方ない。あの偽予告を作った、

プロデューサーを恨みなさい！」

剣崎「俺のキャラってこんな感じだったわけ?!」

水城「ディケイド本編をもう一度見返せ、

良太郎をおもちゃにしがった奴め」

剣崎「俺の扱い酷くね?!」

ということで、次回お会いしましょう！（逃）

士「俺も出せ!」

全てを破壊し、全てを繋げ！

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎（前書き）

- ・夏海が動き始めます
- ・士、目覚める
- ・乾と渡の会話

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめくり、その瞳は何を見る？

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎

キバーラは当初夏海を利用しようとしていた。

夏海の心身に乗っ取り、自分の思い通りに事を進めようと。鳴滝の命令を無視して。

だが、そんな必要はなかったのだ。

夏海が自分からディケイドを倒すと決心してくれたからだ。

しかしキバーラはただディケイドを倒すだけではつまらないと考えていた。

夏海がディケイドを倒した後、のことを考えていた。

キバーラ「（鳴滝さんからは何も指示されていないけど……。アタシだって好きなことをしたいわ。）」

キバーラはニヤリと笑い、暗闇の中へと消えていった……。

乾「渡。お前を呼んだ理由はわかるよな？」

渡「破壊者のことですか。」

乾「ああ。」

乾と渡は二人きりで話し合うために、別室にいた。

破壊者のこと、鳴滝のこと、そしてディケイドのこと……。

まだまだわからないことが多すぎる。

乾「ディケイドがこの世界に2人いることは知ってるだろ？」

渡「ええ。ディケイドとファイナルディケイドですよね。それが？」
乾「ディケイドがここまで破壊行動をしていない理由をつかんだぜ。」

渡「え！？」

今までディケイドが破壊行動（破壊衝動）を抑えられてきた理由。それは隣にいつも「光夏海」がいたかららしい。

渡「その情報は確かなんですね？」

乾「ああ。ファイナルディケイドが破壊衝動に駆られたのもやはりこれが原因している。」

渡「しかし・・・！最初はまだ夏海さんは傍にいましたよね？」

乾「・・・忘れたのか。大ショッカーの存在を。」

渡「・・・！！」

大ショッカーによって夏海を連れ去られたNディケイド（鳴滝のディケイド）。

夏海を取り戻すことはできたが、その闘いの最中に、いつも一緒に旅をしていた仮面ライダークウガが自分をかばって死んでしまった。世界の融合を防ぐために俺らはNディケイドと闘った。死に物狂いで。

・・・最終的に。

カブトのライダーキックがNディケイドをかばった夏海に当たってしまった。そのまま・・・夏海は彼の目の前で死んでいった。その時の表情を未だ忘れることはない。・・・笑っていたから。

ここからNディケイドは激情態となった。ただ破壊する。それだけを目的として。

乾「結果はNディケイドの完全勝利。俺らは必死で逃げてきた。」
渡「・・・。乾さん。僕もあなたに話さねばならないことがあるん

です。」

乾「なんだ？」

渡「それが」

野上「渡さん！乾さん！！！」

渡の言葉をさえぎるように、部屋の中に良太郎が入ってきていた。

乾「野上か。どうした？」

野上「士さんが目を覚ましました！！！」

渡「本当ですか？！」

夏海の目の前には剣崎が立っていた。

夏海「剣崎さん。私に何か用ですか？」

剣崎「光夏海。お前は勘違いしてることがある。」

夏海「なんとなく予想はつきますけど。一体なんですか？」

剣崎「いいか、よく聞け。お前は鳴滝にだまされているだけだ。利用されているだけなんだ。」

夏海「何を言ってるんですか。鳴滝さんは本当のことを話す、と言っていました。だから私が聞いたことはすべて本当なんです。」

剣崎「・・・夏海。思い出してみる。お前とディケイド・・・門矢士の思い出を。」

夏海「思い出したって何も変わりませんよ。私がディケイドを倒すまでは・・・。あなたもディケイドを倒さなければ世界は救われな
いと言っていたじゃありませんか！・・・私がディケイドを倒しま

す。なので邪魔だけはしないでください。」

剣崎「今の士に・・・そんな闘いができるほどの体じゃない。もう少し待ってくれないか？」

夏海はニヤツと笑った。

剣崎「な、何がおかしい!!」

夏海「結局はあなたもライダーにしかすぎない、ってことです。結局デイクイドを倒すことはできなかった。」

剣崎「そ、それは・・・」

夏海「なぜ倒せなかったか教えてあげましょうか?・・・あなたはまだ迷っているんです。デイクイドを倒して本当に世界が救われるのか、ってね。」

剣崎「迷ってなどいない!ただ・・・、ただ今の状態であいつを戦わせるわけにはいかないってことだ!わかってくれ!!君も悪魔じゃないんだ。頼む!」

剣崎が必死に頭を下げる。

だが夏海はそれを無視して、その横を過ぎ去ろうとした。

剣崎「・・・どうしてもというのなら仕方ない。ここで痛い目にあってもらう。」

夏海「・・・剣崎さん。意味のない戦いはしないほうがいいと思いますよ。お互い体力がもつたいないですし。」

剣崎「だったら俺が言ったこと、わかってくれるのか?」

夏海「・・・。」

剣崎が夏海と会っているとき、士は目を覚ましていた。
痛々しい体を少しずつ起こしながら、あたりを見回す。

士「どこだよ、ここ・・・。」

野上「あ、目覚めましたか？」

士が小さな声で呟くと、部屋のドアの隙間から頭をひょこんと出す
野上がいた。

士「お前は・・・？」

野上「あ、野上良太郎といいます。」

士「・・・もしかして仮面ライダー電王か？」

野上「はい。なぜそれを？」

士「パラレルワールドで電王の世界に行ったことがあるからな。」

野上「そうですか。あ、まだ寝てないとだめですよ。水入れてきますね。」

野上が出て行ったのを見て、士はそのままベッドへ倒れこんだ。
まだ体が重い。熱も高いようだ。おでこには冷え　タが貼られている。
た。

士「・・・夏海。」

夏海「仕方ありませんね。無駄に体力を消耗したくありませんが。」
剣崎「じゃあ行くぞ。・・・変身。」

夏海「キバーラ!!」

キバーラ「はいはい?いくわよー!」

夏海「変身。」

夏海VS剣崎の闘いが始まった!!!!

T o b e c o n t i n u e ...

第九話 乾と渡、そして夏海と剣崎（後書き）

あれ、まだ土が空気に近いような気がします
次回をもっと出てきますよ。

そろそろ夏海VS土も入れたいのね・・・！
それから、次回あたりでユウスケが登場する予定です

楽しみに！

世界を破壊し、世界を繋げ！

第十話 二人の固い絆（前書き）

- ・ ユウスケが彼らと合流
 - ・ 自分を責めるユウスケ
 - ・ 士も自暴自棄気味
 - ・ やはりヒビキは安定剤
- （夏海VS剣崎は次回）

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十話 二人の固い絆

士はまだ思うように動けないので、まだ横になっていた。そして深く考え込んでいた。

自分がここにいていいのか、そして俺はやはり鳴滝が言うように「本当の破壊者」なのか。否か。

ユウスケや夏海や海東の安否も気になる。特に海東だ。

あのまま姿を見ていない。ユウスケもまだあのままなのか・・・夏海だって・・・。

士「くそ・・・！」

一人では何もできない。俺の力だけじゃ何も・・・。

今までは他のライダーの力を使って戦ってきた。

一人じゃない。隣にはいつも誰かがいた。その環境に慣れ過ぎたのかもしれない。

夏海達と出会う前のことは曖昧だ。でもきつと一人だったと思う。自分の性格からしてきつと。

士がため息をつく、外が騒がしくなった。

複数人数の足音と話し声が聞こえていた。

士「・・・何かあったのか？」

『バン!!!!!!!!!!』

ユウスケ「士!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

野上「あ、ちょっと!!!!」

ヒビキ「青年！ちょっと落ち着いて！」

息を切らしたユウスケが部屋に入ってきた。

士は目を見開き、ユウスケを見た。

士「っ！？ユウスケ?!」

ユウスケ「ハアハア・・・士・・・！」

士「なんでお前が・・・それより・・・元に戻ったんだな。」

ユウスケ「・・・ああ。士は大丈夫なのか？俺、五代さんに聞いてこの場所を教えてもらったんだ。」

士「五代？誰だそれは。」

ユウスケ「俺を元の戻してくれた救世主だよ！」

野上「士さん、この人は？」

士「俺の仲間だ。」

ユウスケ「あ！紹介が遅れてすみません。小野寺ユウスケです。」

ヒビキ「・・・クウガくん？」

ユウスケ「え？あ、はい。そうですね・・・？なぜそれを？」

ヒビキ「いーや。こつちの話。」

ユウスケ「・・・???」

士はヒビキの様子を怪訝そうに見たが、追及はしなかった。

士「・・・。ユウスケ。お前、何かあったのか？」

ユウスケ「っ！！え・・・！」

士「さつきから空元気っぽい感じがするぞ・・・？」

ユウスケ「・・・っ・・・！士・・・。今から話すこと・・・最後まで聞いてくれるか？」

士「・・・ああ。当たり前だろ。」

野上は二人の空気を察したのか、部屋を出て行った。
しかしヒビキは居座る気満々のようで、近くのイスを取ってきて座っていた。

士「あんたは残るんだな。」

ヒビキ「一応剣崎くんから言われてるからね。まあ別に俺はどっちでもいいんだけど。世界とかよくわかんないし。そんなに深く考えてもしょうがないって思うし。ははは！」

ユウスケは自分の周りで起きたこと、そして海東との出来事について話し出した……。

俺、ちょっと前まで記憶がなかったんだ。

五代さんに話しかけられるまで……。ずっと暗闇の中をさまよってた。

だからそれより前のことははっきりと覚えてない。自分が何をしたのかってことも……。

でも……。俺、とんでもないことをしてしまったんだよ……！

一緒に戦ってきたのに……。俺の手は誰かを握りつぶすことのために使ってきたわけじゃないのに……。俺の目的はみんなの笑顔を守るため、だったのに……。！！

……。俺が目覚めた時にはもう事がついてたんだ。もう手遅れで……。どうしようもなくで。

目の前に血まみれの海東が倒れてたんだ。それを見た瞬間俺がやつたんだって思ったんだ。

海東は『弱い僕が悪い』って言ってたけど。弱いのは俺だ……。！
究極の力に吞まれる俺が弱いんだ！

もつといけないのはそのまま海東を置いてきてしまったこと……。絶対に助ける！って……。そのときは言葉に出してたけど。本当にそう思ってたのかな、って……。！
俺……。最低だ。

あのととき士を守れたって思ったけど……。結局はこれだよ。

やっぱり俺は何も守れないんだ、って。誰かの笑顔を守るところか、失ってるんだって。

そんな俺に……。クウガの資格なんてないよ……。

士「……。ユウスケ……。」

ユウスケ「士……。俺のせいで海東が……。！」

士は戸惑っていた。

目の前のユウスケのことも。そしてユウスケが話した海東のことも。そして自分を責め続けているユウスケに、何も言えない自分にも腹が立った。

士「（俺はこいつに何を言ってやったらいい？ どう声をかけてやればいい？）」

ユウスケ「ごめんな、士。俺が全部悪いんだ。俺、五代さんに助けてもらってなかったらきつと……。夏海ちゃんや士にだってあんなことしてたかもしれないんだ……。俺……。クウガでいる資格なんてないんだよね。は……。誰か、俺のかわりになってくれる人いないかな……。」

士は過去のことを何一つ覚えていない。

訳もわからないままディケイドとなって闘ってきた。世界を救えてきたと思っていた。

たまに面倒なこともあったが、それなりに楽しく旅をしていたつも

りだった。

でもどこかで……。どこかで自分はこんな楽しい毎日を送ってもいいのか、と思うところもあった。

士「（以前の俺を知る人物が現れたら……。どう思っただろうな。）」

鳴滝に『本当の破壊者はお前だ。』だの、『お前は俺だ』だの言われたことも、今の士には響いているのかもしれない。

それにまだ夏海の姿を見ないというのも、彼の中で気持ちが揺らぐ原因でもあった。

彼女もまた、彼にとって大切な仲間だから……。

そんな二人を見ていたヒビキが、突然話し出した。

ヒビキ「自分のかわりなんていないと思うよ。」

ユウスケ「……え？……」

ヒビキ「青年……小野寺くんのかわりなんて誰もいない。変わってくれる人なんて誰もいないんだよ。君たちは約束したんじゃないか？『笑顔を守る』って。」

ユウスケ「だけど……。俺は反対のことをしてしまったんですよ……？」

ヒビキ「誰にだって間違いはするさ。大丈夫。まだやり直せる。若いんだしね、ははは！」

ヒビキ「……それから。」

ヒビキ「海東くんは死んでいないよ。」

ユウスケ「……え?!」

ヒビキ「うん。だから安心しなよ。小野寺くんは『世界中の人の笑顔を守る』んだろ？土くんは『小野寺くんの笑顔を守る』んだろ？」

土は驚いた。なぜ最近あつたばかりの人間にそのことがわかっていいのか、ということに。

ヒビキ「大丈夫！もっと自信を持って！本当の敵は他にいるらしいからね。今、いろいろと調べてるところみたい。これからきつと仲間として闘うことになるだろうから・・・よろしくね！」

ヒビキはそう言って笑うと、部屋を出て行った。

土とユウスケは黙ってお互いの顔を見合った。そして笑った・・・。

土「こいつが人の笑顔を守るなら、俺は・・・こいつの笑顔を守る
！！！」

T o b e c o n t i n u e . . .

第十話 二人の固い絆（後書き）

本編に出てきたセリフを少しずつ使うように努力しています。

今回は第3話に出てきたセリフです。すごいあのシーンが心に残っています。

それまでの土とユウスケって微妙な関係性でしたけど、これによってグツと距離が縮まったように感じるんですよ。やっぱり「土の説教」って偉大だなんて思いましたね（笑 天道語録に続く、土の説教もライダーファンの中には有名なんじゃないんでしょうか？

それではまた次回お会いしましょう！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目（前書き）

- ・ 夏海VS剣崎
- ・ 海東の本来の役目と思惑
- ・ 鳴滝の思惑と海東
- ・ 士、夏海と・・・

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目

夏海は剣崎に対して優勢だった。

戦いは初めてだったが、全てキバーラが指示してくれる。

その通りに動くだけだったし、これなら自分でも戦えると思った。

逆に剣崎は焦っていた。

戦いが初めてのはずの相手にこんなにも苦戦するとは思っていなかったのだ。

彼女に少しだけ痛い目を遭わせ、鳴滝の思惑を聞こうとしていたのに……。

このままだと自分が危ない。

そう思った剣崎は少し間を取った。そしてこう尋ねた。

K 剣「光夏海。君の目的はディケイドを倒すことだけなのか？」

夏海「はい。それが私の役目です。私にしかできない……役目です。」

K 剣「驚いたな。君は鳴滝の思惑を見切ると思ったんだが。」

キバーラ「夏海ちゃん、こんな話に付き合ってる暇はないわよ？ 一気に行くわよー！」

やはり。

キバーラは鳴滝とつながっている。ということは鳴滝の思惑はすべて把握しているはず。

だから今も話を止めようとした。その前に……剣崎はなんとかとめる必要があったのだ。

K 剣「しょうがない。痛いかもしれないが、この攻撃を受けてもら

「スピードテン！ジャック！クイーン！キング！エース！ロイヤルストレートフラッシュ！」

夏海「きやあ あああああ！」

キバーラ「あら、剣崎一真。女の子にも容赦ないのね。だからモテないのよ。」

「キバーラ。あら。ディケイドの居場所を知っているようね。」

剣崎「光夏海。ディケイドは世界の融合を進め、世界を破壊しようとしている。それは本当だ。しかし……。鳴滝に何を吹き込まれたか知らないが……。君の役目はディケイドをとめることだ。」

劍崎「……、
”ディケイド”を恨んでいる。お前のよく知る土と
やらは……」

ウクウガと闘ったときに出来た傷は、目を覚ました時には完全に治

っていた。

自分でも驚いた。この世界は本当に現実か、と。

海東「・・・そうだ。僕はディエンドだったな。」

ディエンドの役目。

彼は本来の役目を封印していた。それがきっかけでまた世界は消滅へと向かっている。

その現実を。彼は気付いていた。

彼の役目は「世界を修復すること」。

ディエンドライバーの力で「リセットすること」。

その役目をしなかった理由は簡単だ。

海東「せつかくできた仲間を失うことになるじゃないか・・・。」

『仲間』。

彼が一番嫌いな言葉だった。

そんなものができたとしても、結局は失われてしまう。そう彼の脳裏に焼きつかれていた。

だが、土と出会って彼のその考えは変わってきていた。

海東「せつかくのお宝を・・・ここで逃がすわけにはいかないんだ。

・・・ねえ、鳴滝さん？」

鳴滝「・・・！」

海東は近くで聞いていた鳴滝に声をかけた。

鳴滝は驚いた顔をして、海東のもとへ出てきた。

海東「驚いたな。鳴滝さんがまだその姿でいるなんて。」

鳴滝「・・・ファイナルディケイドのことか。もうすでになっ

る。」

海東「ほお。じゃあなぜまたその仮の姿に？」

鳴滝「君に面白いことを教えてあげようと思ってな。この姿のほうがいい動きやすい。」

海東「大体想像はつくけどね……。どうせ土のことだろう？」

鳴滝はニヤリと海東に笑いかけた。

鳴滝「デイケイドは今……。あいつらの陣にいるぞ。」

海東「……。?!」

海東は驚いた。

海東「（土が……。捕まったということか？いや、きっと他に理由があるはず……。まさか。）」

海東「鳴滝さん。あなたが何かしたんだろう？だめだなあ。土は僕の宝だよ？その大事な宝を傷つける奴は……。僕が許さない。」

鳴滝「ふん。ちよつと遊んでやったただけだ。ファイナルデイケイドの姿で、な。」

海東「じゃあ聞くけど。ナツメロンを使って何をする気だい？」

鳴滝は表情をしかめた。

海東「ナツメロンは……。君にとっても大切な人はずだ。それなのに……。」

鳴滝「私は何も知らない。私はただ……。！デイケイドを倒すことを彼女に言っただけだ！」

海東「……。はあ……。鳴滝さん。今度はあなたが思ったことをナツメロンが味わうことになるってこと……。わすれてるんじゃないかな？」

鳴滝「……。」

海東「鳴滝さん。ディケイドを倒さなければいけないことはわかる。そして僕の役目も果たさねばならないことだって。けどね？……ナツメロンと土の絆にひびを入れさせちゃいけないと思うな。」

鳴滝はうつむいて、唇をかんだ。

その鳴滝を見て、海東はほほ笑む。

海東「とりあえず、僕はナツメロンと土を探しに行くよ。鳴滝さんもはやく決心したまえ。」

8人のライダーがいる陣はあわただしくなっていた。それもそのはず……。

渡「土さんがいない?!」

城戸「すまん!!!!俺が……うとうとしている間に……。」

土が部屋から……この城から脱走していたからだ。

ユウスケも焦っていた。

ユウスケ「……鳴滝さんや夏海ちゃんに会ったら……!!」

ユウスケが飛び出していった。

野上「あ、小野寺さん!!!!!!」

ヒビキ「とりあえず、良太郎と俺で探しに行ってくるよ。渡は剣崎に伝えておいてくれる?」

渡「はい……。わかりました。」

天道「ったく。だから言っただ。こんな馬鹿に見張りをやらせるのはだめだ、とな。」

乾「天道!これ以上言っな!それに、お前だって近くにいただろうが!!!!」

城戸「ほんとにごめん……。!!!!」

津上「城戸さんだけの責任じゃありません。僕たちだってここにいたんですから……。」

野上とヒビキは土を探しに出かけ、渡は焦りながらも剣崎に連絡をしている。

天道は特に何も考えていないように見えて、少し後悔しているような表情を時々していた。

乾はその天道を抑えながらも、いてもたってもいられないくらい心配していた。

津上は城戸のそばにかけよって、優しく話しかけていた。

そのとき。

土がもつすでに夏海と遭遇していたとは知らずに……。

To be continue...

第十一話 海東と鳴滝の思惑と役目（後書き）

今回は海東と鳴滝の場面がメインです。

剣崎VS夏海の場面が少なくてごめんなさい…；

次回は士VS夏海の場面を全面的に書くつもりです！！

この戦いが終われば、終盤戦に向けてキューピッチに進んでいきそうな予感がします。

がんばって更新作業をしていきますので、

応援・感想等よろしくお願いします！！！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十二話 退くか、それとも闘うか（前編）（前書き）

・夏海VS士

・士、いきなりコンプリートフォームになります

（設定いきなり無視（爆）ただ、あまり意味はありません）

今回は夏海VS士を前編・後編にわけてお届けします。

（ 注意 心理描写多め、戦闘シーン雑 ）

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十二話 退くか、それとも闘うか（前編）

城から土がいなくなつて、彼らが騒いでいる間、

土はひとり、何かに導かれるように・・・彷徨っていた。

なぜ今自分がここを歩いているのか。皆目見当がつかない。しかし、きっと誰かが自分を呼んでいるのだ。そう思った。そして彼の足が止まった。

目の前にはキバーラと夏海がいた。

土「・・・夏海か。」

夏海「土くん。来てくれるって信じてました。」

土「・・・そうか、俺を呼んでたのはお前だったのか。」

夏海「ええ・・・。土くん。単刀直入に言います。」

土「・・・大体想像つくが・・・言ってみろよ。」

夏海「土くん。いえ、破壊者ディケイド。世界のために死んでもらいます。」

土はこうなることを予想していたかのように、平然な顔をして夏海を見ていた。

しかし内心はそうではなかった。

夏海が今からすることについては大方予想はついていた。きっと自分を倒しに来ると。

だが。自分の中で葛藤していた。

土「（俺は夏海と闘えるのか？本気で・・・？）」

向こうが本気なら、こちらも本気で向かわねばならない。

キバーラ「ディケイド？夏海ちゃんの本気よ？生半可な気持ちで受けるんなら・・・ただじゃおかないわよ。」

士「そんなつもりはさらさらない。いいぜ。俺を倒せるもんなら倒してみるよ。」

夏海「強気でいられるのは今のうちですよ・・・。」

士は戸惑った。

目の前の相手がこんなに激しいオーラを見せたことが、今まであっただろうか。

そして、戦いに不慣れな筈なのにこれほどの自信に充ち溢れている。きつと戦いの指示はすべてキバーラの役目なんだろう。とにかく、彼はこの場の雰囲気戸惑っていた。

夏海「そろそろいきますよ。」

士「・・・ああ。いくぜ。」

夏海・士「変身！」

「KAMEN RIDE DECADE !!」

士は仮面ライダーディケイドに、そして夏海は仮面ライダーキバーラへと変身した。

DCD「その姿は・・・?!」

キバーラ「これがキバーラの真の姿よ。」

DCD「そうかよ・・・。それじゃ、一気に行くぜ。」

「KUUGA AGITO RYUKI FIZE BRAD E
HIBIKI KABUTO DEN-O KIVA
FINAL KAMEN RIDE DECADE!!」

キバーラ「あら？コンプリートフォームは使えないはずじゃなかったかしら？」

CDCD「どうか。やってみなきゃわかんないぜ。」

とはいもの、少し不安げな士。

だがそんな不安など気にしている場合ではなかった。まずは彼女の動きを止める必要が・・・

CDCD「んぐうあ!!」

Nキバーラ「よそ見をしている余裕なんてありませんよ!!」

少し考え事をしていたすきを突かれてしまった士。

どうにか攻撃を最小限に済ますことはできたが、パワーもあるせいか少し傷が痛んだ。

CDCD「ちつ。なかなかやるんだな!!」

「ATTACK RIDE BLAST!!」

バン！ バン！ バン！

Nキバーラ「そんな単純な攻撃じゃ私には勝てませんよ!!ハアアアア!!!!!!」

夏海が士がいるすぐ手前まで走りこんできて、士のボディを殴った。

CDCD「んぐああ!!」

士はなかなか思うような戦い方ができず、焦っていた。
息も上がってきていた。本調子ではない士にとって、この戦いはも
ともと不利だ。

だが、ここで引き下がるわけにはいかない。覚悟を決めなければな
らないのだ。

その後も一方的に夏海が攻撃をしている。

Nキバーラ「さっきの勢いはどうしたんですか!ディケイド!!ハ
ア!!」

CDCD「うあ・・・!!!!ちっ・・・。そろそろ痛い目遭わせねえ
といけないみたいだな!」

「ATTACK RIDE SLASH !!」

「FINAL ATTACK RIDE DECADE !!」

CDCD「おらあ!!!!」

Nキバーラ「キバーラ!いきます!!」

キバーラ「オツケー!!」

Nキバーラ「うああああああ!!!!!!」

その二人の闘いをそっと見つめる影が二つ。

一人は鳴滝という男。ファイナルディケイド、門矢士でもある。
もう一人は五代雄介。仮面ライダークウガに変身する者だ。

五代「門矢さん！」

鳴滝「今は、鳴滝だ。」

五代「・・・なれないなあ、その姿には・・・。ところで。本気な
んですね、あなたは。」

鳴滝「何をだ。」

五代「・・・あの時あなたが味わった苦痛を、今度は彼女に負わせ
るつもりだと・・・？」

鳴滝が唇をかむ。その様子を五代は見、そしてニコツと笑った。

五代「今ならまだやり直せるはずです。彼らの闘いをとめてあげて
ください・・・！」

鳴滝「とめるわけにはいかない！！ディケイドを倒さなければ何も
変わらない！誰かがその役目を果たさない限り！何も始まらない！
何も・・・。」

鳴滝の表情は見えない。しかし五代にはわかった。
彼もまた迷っているのだと・・・。

T o b e c o n t i n u e …

第十二話 退くか、それとも闘うか（前編）（後書き）

五代さん完璧に登場（笑）

今まで、名前を出してセリフを言うつていう場面がなかったの、わかりにくかったかなあと思ったので、ここで登場させてみました（笑）

そして士VS夏海。

これは本当にしっかり書かないと！と思ったので前編と後編に分けさせていただきました。

でも、これで終わりじゃありません。

ここから！ラストへと向かっていく大事な話です！できれば20話くらいには終わりたいところですが・・・それは多分難しいと思うので、じっくりじっくりと考えながら更新作業をしていきます！

長くなりました。

次回の「仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦」をお楽しみに！！！！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十三話 退くか、それとも闘つか（後編）（前書き）

- ・士VS夏海
- ・戦闘不能になったところで五代登場
- ・ディケイドがいる意味

世界の破壊者ディケイド。

ライダー対戦の世界をめくり、その瞳は何を見る？

第十三話 退くか、それとも闘うか（後編）

お互いの必殺技を受けて、辺りは大きな爆発が起こった。

士と夏海はお互いその攻撃を受けたが、ダメージの違いがあった。

夏海は急所をはずしておりかすり傷程度で済んだのだが、士は夏海の攻撃をまともに受けたせいか、変身が解けていた。

士「んぐあ……！！！！ガハッ！！！」

口から血を吐き、息もあがっている。

もつとも、士らしくない闘い方ともいえた。

本来の彼なら、急所をはずすようなことは絶対にしない。ある程度痛めつけられるくらいの攻撃は仕掛けるはずなのだ。

夏海は少しいらしていた。士の闘い方に。

Nキバーラ「士くん。なんで本気で闘おうとしないんですか！！！」
士「……」

士は何も言葉にしない。ぼろぼろの姿になりながらも必死で立ち上がろうとしている。

キバーラ「まだやるつもり？ だったら覚悟しといたほうがいいわよ？」

士「もともとお前らはそのつもりで俺と戦ってるんだろう……？ だったら最後までやれよ。」

キバーラ「あら、もう変身しないつもり？」

「KAMEN RIDE DECADE ！！！」

DCD「・・・もつと当たってこい！俺を倒すことがお前の役目なんだろうが！」

Nキバーラ「・・・土くん・・・わかりました。キバーラ！いきますー！」

キバーラ「・・・オツケー！」

士の体力はほとんど限界に等しい。この戦いの終わりも見えている。だが士はやめようとしなかった。今の彼は・・・何を考えているんだろうか・・・。

キバーラは思い出していた。士たちとであつたときのことを。そのときの彼はまだ少し仲間という言葉に抵抗があつた時代。

しかし、一緒に旅を続けていくにつれて彼には仲間との絆という言葉が似合っているような気がしていた。

そんなときにおきた今回のライダー大戦。いや、前回のライダー大戦のときのディケイドも同じだった。前回と今回のディケイドが同一人物だから当たり前なのだけれど。

キバーラ「（もう目の前の男は覚悟を決めている・・・。なぜ？相手が夏海ちゃんだから？・・・もうわからない・・・。鳴滝さん。あなたはこの場面を見てどう思うの？・・・ねえ・・・。）」

「ATTACK RIDE SLASH！！！」

DCD「ハアアア！！」 《カキン！！》

Nキバーラ「っ！！きゃあっ！！！」

まだ士に力は残っているようだ。夏海の攻撃を押し返した。

だがもう彼に何かを仕掛ける体力は残っていない。彼女の攻撃を受けるか・・・少しよけるか庇うかするだけ・・・。攻撃を受ける回数がだんだんと増えていつている。

Nキバーラ「そろそろおしまいにします!!!!ハアアアアアアアアア!!!」

DCD「...ハアハアハア...」

「FINAL ATTACK RIDE DECADE !!!」

士の必殺技は彼女の剣によってはじかれ、そのまま夏海の攻撃が彼の体に直撃した。

士は変身を解除され、そのまま大きく体が吹き飛ばされた。地面に強くたたきつけられた士は、顔をゆがめながら必死で立ち上がろうとするがそのまま倒れこんだ。

夏海は変身を解き、彼の元へ駆け寄った。

キバーラ「どうするの？まだ生きてるわよ？」

夏海「・・・。」

夏海の脳裏には今まで士と過ごした思い出が映りだされていた。

必死で思い出すのをやめようとしている夏海だが、忘れよう忘れようと思つたびに強く彼のことを脳裏に映るのだ。今の夏海に・・・士を倒すことはできなかった。

夏海「・・・しばらくは目を覚まさないと思います。このままいいです。」

キバーラ「あら、そう。だったら目を覚ましたときはどうするの？」

夏海「・・・それは・・・!」

キバーラは夏海のうつむいた表情を見てニヤツと笑った。

キバーラ「そのときが来る前に。今のうちに倒しておかないとだめなのよ。」

夏海「・・・そんな。」

五代「それはちょっと間違ってるんじゃないですか？」

キバーラ「あら？見かけない顔ね。」

五代「士くんを・・・ここで失うわけにはいかないからね。今後のためにも。」

キバーラ「今後なんてないわよ。ここでデイケイドを倒して、すべての世界が救われる。」

五代「君は鳴滝さん・・・ファイナルデイケイドから何も聞かされていないって事ですね。よくわかりましたよ。」

キバーラ「何ですって？！！いったいどういうことなのよ！！！」

夏海は二人の会話を聞いていたが何のことを話しているのかまったくわからなかった。

彼女のそばには倒れているデイケイド・・・士がいた。

夏海「（私は・・・私は本当にこれでよかったの？士くんは私に倒されることを望んでいたんですか？・・・デイケイドは、本当に倒されなければいけなかったの・・・？）」

五代「とにかく。デイケイドがいてもらわなければ困ることが先々起こるんです。彼を君に奪われる前に俺が彼を奪い返しにきたんだ。

」

夏海「あの！まってください！！」

五代「・・・夏海さん、でしたね？」

夏海「あ、はい・・・。教えてもらいたいことがあります。」

五代「手短に話せることなら。」

夏海「ディケイドはなぜ生まれたんですか？」

五代「・・・もともとディケイドは大シヨッカーのものだった。そのとき首領だったのが門矢士。これは君も知っていることだと思っただけど？」

夏海「はじめからわかって作られたんですか？ディケイドが世界の破壊者となるってことを・・・。」

五代「それは・・・俺にもわからないよ。俺は大シヨッカーの人間じゃないしね！」

そういつて五代は士を担ぎ、オーロラの中へと消えていった。

ディケイドの存在意味。

それはまだ一人の人間を除きわかっていないことである・・・。

鳴滝はあせっていた。

自分の体思うように動かなくなっている。

彼は悟った。もうそろそろこの姿でいられることも限界が近いのだと。

鳴滝「・・・ディケイド。そろそろ終わりが近づいているようだ。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
...

第十三話 退くか、それとも闘うか（後編）（後書き）

うーん・・・

眠い中書いているのでどんだけまともなのかわかりません（汗）
加筆すると思います、この回・・・最も自信がない回になってしま
った。

一番大事な話のはずだったんですけどねえ・・・

次回はユウスケ達が夏海と合流します。

そしてやはり五代は偉大です。

お楽しみに！！

すべてを破壊しすべてを繋げ！

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断（前書き）

- ・夏海に本来話すべきことが話される。
- ・鳴滝が決断したことは一体・・・
- ・五代は偉大（＝執筆者は五代最良らしい）
- ・士が空気

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断

夏海は立ち尽くしていた。

先ほどの闘いは自分が勝った。でも嬉しいという気分ではなかった。デイクイドを倒し、世界が救われたとしても……。その後は？士くんは消えたままなの？

キバーラには『早くデイクイドを見つけ出して』とくぎを刺された。でも……。この場所から一步も動くことができなかった。

その前の闘いの傷が癒えていないであろう士くんを……。私は一方的に攻撃をした。キバーラに指示されながら、だけど……。

鳴滝さんは『デイクイドをとめられるのは君だけだ』と言っていた。でも……。まだ士くんは破壊者として覚醒していない……。気がした。制御装置は壊れていると言われても……。ピンとこない。

夏海「私は……。私は……。！……。どうしたら……。。」

夏海は涙をこらえきれず、その場に崩れ落ちた。

あの決断が正しかったのか。そんなことはどうでもよかった。

鳴滝を簡単に信じてよかったのか。それもどうでもよかった。

ただ。キバーラの言うことを信じてよかったのか。それだけが頭をよぎったのだ。

鳴滝はデイクイドをなぜか恨んでいる。倒してくれ、とまでは言っていないかったが、デイクイドを止めてくれ、とは言っていた。

ネガの世界の夏海は『デイクイドを倒す』と断言していたのを夏海は思い出した。

そのデイクイドとは……。本当に士のことなんだろうか、と。

ユウスケ「・・・夏海ちゃん？」

するはずもない声が夏海の耳に飛び込んできた。
見上げると心配そうな表情をしているユウスケがたっていた。

夏海「・・・ユウスケ・・・!!」

ユウスケ「大丈夫?! 何があつたの?!・・・あ、そういえば・・・
! 土見なかった?? 急にいなくなっちゃってさ・・・。」

夏海「・・・。」

夏海は信じられなかった。

ユウスケはアルティメットクウガになつたはず、と。

夏海「ユウスケはなんでここに・・・? なんで・・・!」

ユウスケ「な、夏海ちゃん?! な、泣かないで!! お、俺、どうしたらいいかわからないよ・・・!! (あたふた)」

夏海「ご、ごめんなさい・・・。」

ユウスケ「謝らないで・・・! もっと俺わかんなくなっちゃう・・・。」

夏海「ふふ! ユウスケは相変わらずですね。」

ユウスケ「えええ?! どういうことだよ・・・!」

2人の空気が和やかなモードになっている中、周りの空気は違っていた。

それに気づいた夏海は、はっとする。

そこには紅渡、剣崎一真など知っている顔や知らない顔の人間が二人を囲んでいたからだ。

夏海「ユウスケ・・・。」

ユウスケ「え？ああ。この人たちは・・・今は一緒に土を探しに・・・」

剣崎「小野寺。お前はちよつとさがってる。」

ユウスケ「え？ああ・・・うん。」

剣崎は単刀直入に夏海に尋ねた。

剣崎「デイクイド・・・。いや、土をどこにやった？」

ユウスケ「え？！なんで夏海ちゃんにそんなこと聞くんだよ！！」
渡「小野寺さん。」

渡がユウスケを制す。

剣崎「お前はデイクイドを倒すのが目的だったんだろう？」

ユウスケ「・・・そんな・・・。夏海ちゃんが？！」

剣崎「ここには戦闘の爪痕が残っている。だが・・・その本人がいない。」

津上「・・・消滅した・・・ってことですか？」

ユウスケ「・・・！！！？？」

夏海「ちがいます！私は・・・」

剣崎「しらはつくれる気か？仮面ライダーキバーラ。」

渡「剣崎さん。とりあえず彼女の話聞きましよう。それからです。」

剣崎「・・・それもそうだな。」

確かに私は土くと闘いました。

土くんはほとんど私に対して攻撃をしてこなかった。戦い方も本気

じゃなかった。

でも・・・土くんは私に倒されることがわかりきっているみたいに、
こう言っただけです。

『もつと当たってこい！俺を倒すことがお前の役目なんだろうが！

！』って・・・。

そこからはキバーラが指示するまま動いていました。

そしたら・・・土くんが倒れたんです。でもまだちゃんと息はありました。

それに気づいたキバーラがとどめを刺しなさいって言ってたんです
けど・・・それはできなかった。

その間に誰かが来たんです。その人の顔は見たことがなかったんで
すけど・・・。

その人が土君を連れてどこかへ消えていきました。私が話せること
はここまでです。

ユウスケ「夏海ちゃん・・・」

夏海「鳴滝さんに言われました。ディケイドを止められるのは私だ
けだって。ディケイドライバーの制御装置がもう壊れているって・
・。何のことは分らなかったんですけど・・・。」

剣崎「・・・五代か。」

渡「五代さんに間違いないでしょうね。」

ユウスケ「え？五代さんが土を？」

渡「ええ。五代さんは別ルートで今回の件を調べてもらっていたん
です。」

剣崎「それから・・・。光夏海。」

夏海「・・・はい。」

剣崎「確かにディケイドを止められるのはお前だけだ。それは確か
だ。でもな、その制御装置がどうのこうのって話には妙に引っ掛か

るところがある。」

津上「僕もそう思います。」

渡「そこはディエンドに調べてもらっています。」

夏海「大樹さんに？」

渡「ええ。」

鳴滝はまたも焦っていた。

だんだん自分が消滅に向かっていていること。そして『世界の創設者』が現れるかもしれないということ。

鳴滝「・・・私も覚悟を決めなければいけないようだ。」

鳴滝「ディケイド。今度こそお前に話さなければいけないことがあるようだ。」

五代は城へ土を連れ戻しに来ていた。

しかし、城には野上とヒビキしかいなかった。

五代「あれ？他の人たちは？」

野上「五代さんがつれてきた方を探しに出かけました。」

五代「あ、そうだったのか。悪いことしたかな。」

野上「いえ！早い方に越したことはありません。ヒビキさん、五代さん。手当を手伝ってくださいますか？」

ヒビキ「勿論。今度は逃がさないようにしないとな!!」

五代「逃がしたのヒビキさんでしょ？」

ヒビキ「あ、ばれた？」

五代「そりゃばれますよー。だって俺クウガだし。」

野上「五代さん、その理由意味わかんないですよ。」

五代「えー・・・そうかなあ・・・。」

仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

いよいよ本当の敵が明らかに・・・?!

To be continue...

第十四話 夏海の後悔と鳴滝の決断（後書き）

私は五代覇肩みたいです（爆

そして十四話です。

とうとう本当の敵がちらつき始めています。

次回そのことが詳しく明らかになります。

それから・・・久々に海東が何かと闘います。

乞うご期待（駄文を期待しててください）

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者（前書き）

- ・世界の創設者
- ・鳴滝の消滅
- ・士が目覚めます
- ・海東VS？

世界の破壊者ディケイド。
ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者

五代から連絡を受けた渡たちは、一度城に戻ってきていた。もちろん夏海も一緒に、だ。

夏海はベッドに横たわっている土をじっと見つめていた。

ユウスケはその夏海を心配そうに見ていた。土はまだ目を瞑ったまま。

渡「夏海さんがいつも見ている夢。それは今のライダー大戦の世界ではないんです。」

夏海「・・・はい。それは鳴滝さんからなんとなく聞いています。」

渡「その場所にいたデイケイドやあなたそつくりの女性のことも？」

夏海「いえ・・・そこまでは・・・。じゃあ・・・！ユウスケと土くんが戦ったっていたのも・・・以前のライダー大戦のものだったことですか？」

渡「え？」

夏海「私、見たんです。ユウスケと土くんが戦っているところを。そして・・・土くんが勝つところを。」

その夏海の話聞いた渡や剣崎たち原典ライダー9人は驚いた表情をしていた。

城戸「ちよ、ちょっと待ってくれよ！前はそんな戦いなかったぞ？！」

夏海「え・・・？！」

天道「これから起こることもかもしれないな。」

ユウスケ「俺が土と戦うなんて・・・そんなことありえない！もしあいつが暴走したときは・・・今度は俺がとめる！！！」

天道「・・・それがその映像だとしたら？」

ユウスケ「・・・っ！！！！」

つまりこういうことだ。

夏海が見たあの「土VSユウスケ」は過去のライダー大戦のものではなく、これから起こりうる戦いということである。もしそうだとすれば予知夢・・・といえるだろうか。

ユウスケは土・・・ディケイドをとめるためにアルティメットクウガとなった、ということになる。

今回は自分の意志で究極の闇と化した、ということであろう。だが夏海が見た光景は・・・クウガがディケイドに消滅される映像だったのだ。

五代「・・・（0号と戦ったときと同じ・・・なのかな）」

五代だけは自分に思い当たることがあったようだった。

以前、0号と戦ったあの日のことを・・・彼は思い出していた。

初めて素手で人を殴ったという感覚を味わった。自分の手は赤く染まってしまった。

その感覚が消え始めたのはだいぶたった後だ。それ以来結局あの場所には戻っていない。

会えないまま・・・彼の世界も消滅を迎えた。それを彼は後悔している。今でも、これからも。

ユウスケ「俺・・・。もしそんなことが起きたときは、絶対に暴走する土を止めてみせる。ちゃんと元に戻してみせる。予知夢どおりになんて絶対にいかせないよ！」

夏海「・・・ユウスケ・・・。」

ユウスケ「・・・それに・・・。俺は土の笑顔も守らないといけないから！」

ユウスケは笑顔を向けながらサムズアップした。
その笑顔を見た五代は、彼らに『あの人』のことを伝えようとした。
・・・そのとき。

野上「土さん?!」

野上のそう叫ぶ声が聞こえてきた。
土が目を覚ましたのである。

土「・・・っ・・・。」

ヒビキ「このやろう!なんで勝手にでてっちゃうかなー・・・。」
土「・・・悪かったな。」

土はあたりを見渡すと、夏海とユウスケが視線に入ってきた。
夏海は今にも泣きそうな顔をしていて・・・ユウスケは笑っていた。
土「(対照的だな・・・、こいつら。)」

夏海「・・・っ、つかさくん・・・」

土「なんだ、ナツミカン。そんな顔してるとほんとに搾れるようになっちまうぞ。」

夏海「・・・!!」

「ピキ!」 光家秘伝 笑いのツボ

土「ははははは・・・!!おい・・・!け、けが人に!!やることじゃ・・・ねえだろ!!ははは!!!!」

夏海「ふん!もう土君なんてしりません!!」

土「手加減しろ・・・!!っはははは!!!!!!!!」

初めて見る原典ライダーたちはその様子をぽかんと見つめていた。特に剣崎は口を大きく開けて、すごく情けない顔をしている。

乾「・・・、お前ら。さつき戦ったばかりじゃねえか。立ち直りつつーか・・・なんつーか・・・。ああ！もう意味わかんねえよ！！」

津上「大丈夫ですよ、乾さん。僕もわからないですから。」

城戸「いーや！一番わからない状況に陥ってるの、剣崎だぜ。見ろよ、あの情けない顔！！爆笑をさらうぜ！！あー・・・『レン』に見せてやりたいくらいだ！！」

天道「お前もそんな顔をしていたぞ。」

城戸「なんだとあ？！！」

士「・・・あー・・・うるさい。黙れ。」

渡「・・・士さん。もう平気ですか？」

士「ああ・・・まだ体は重いが・・・平気だぜ。」

渡「あなたに会わせたい人がいるんです。」

士「大体わかってる。通せよ、いるんだろ？『鳴滝』。」

鳴滝はふらつく体をヒビキに支えられながら部屋に入ってきた。

士「・・・どうしたんだ？」

鳴滝「・・・私はもう時間がない。手短に言う。」

士「おい・・・時間がないってどういうことだよ・・・！」

鳴滝「・・・世界の創設者・・・仮面ライダーファウンドを倒す・・・。それが世界を救うもうひとつの方法だ・・・。」

士「・・・仮面ライダーファウンドだと？」

鳴滝「・・・そうだ。そうすれば・・・ディケイドがいても世界は生まれない。これ以上破壊も進まないだろう・・・。」

その話を初めて聞いた夏海、士、ユウスケ、そして原典ライダー（五代以外）は驚く。
そして鳴滝は続けた。

鳴滝「……急いでくれ……。ディエンドが向かっている……。その場所へ……。」

士「……海東が……?」

鳴滝「……もう本当に時間がない……。私はここで終わりのようだ。」

士「……終わりだと?どういうことだ!!! 鳴滝……。?!!」

鳴滝「ディケイド。お前は倒されなければいけない存在だった……。だが今の状況下……。ディケイドを倒すことよりも……。もっと大事な……。」（鳴滝がどんどん薄れていく）

士「……鳴滝……。!!!!!!」

鳴滝「ディケイド……。いや、門矢士……。世界を……。世界を救ってくれ……。」

鳴滝が消滅した……。士たちの目の前で。

その事実を知っていた原典ライダーはうつむくような形で、それぞれ部屋を出て行く。

ユウスケと夏海は呆然とした表情をしている士を見つめていた。

士「……どういうことだよ……。なんで……。なんで鳴滝が消えるんだ……?」

ユウスケ「士……。とりあえず落ち着けて。」

士「……。なんだ。ユウスケ……。お前は知っていたのか?」

ユウスケ「……。五代さんから、ちよつとだけ……。」

士「……。夏海も……。か。」

夏海「・・・ごめんなさい・・・。」
士「いや、いい・・・。こうなることは・・・大体わかってた・・・からな。」

ユウスケはその士が言った言葉を否定した。

ユウスケ「(わかってたはずない。士がこんなに動揺した姿なんて・・・初めて見た・・・。俺・・・この士になんて声をかけていいのかわからないよ・・・。)」

夏海もその動揺した姿の士を見て心配そうなまなざしを向けていた。

夏海「(土君・・・私は・・・私はなにをしてあげたらいいの・・・?!)」

鳴滝が消滅した瞬間、海東は一人の男に出くわしていた。

海東「やあ。君が世界の創設者君かい？君のそのベルト・・・お宝だ！絶対にそれをいただく！」

創設者「・・・ふつ。できそこないのディエンドか。そんなお前が我に勝とうなど、戯言にも程があるな。」

海東「失礼しちゃうな。僕はそんなに弱くないよ？」

創設者「・・・なら、ここで始末してやろう。」

「KAMEN RIDER！」

「KAMEN RIDER！」

海東「变身！」

創設者「・・・変、身・・・。」

「DE'ÉND!!」

「FO'ÚND!!」

To be continue...

第十五話 鳴滝の消滅、そして世界の創設者（後書き）

長くなってしまいました（汗

ようやく敵が見えてきました。

世界の創設者「仮面ライダーファウンド」。
もちろんオリジナルライダーです。

次回、このライダーの説明を書きます！！
それでは！！

世界を破壊し、世界をつなげ！！

第十六話 ディエンドVSファウンド そして破壊者（前書き）

- ・土に「破壊者」となる・・・
- ・それをとめるユウスケ達
- ・ディエンドVSファウンド

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十六話　ディエンドVSファウンド　そして破壊者

鳴滝が消滅した・・・。

士はまだそのことを受け入れられていなかった。

彼は先ほど戦ったばかりなのだ。

鳴滝と出くわしたとき。今までは嫌な気分しかなかった。

だが・・・この時だけは違った。

そして士は気付く。

心の奥底が疼くことに。

なぜなのかはわからない。そしてそれがなんなのかも。

ユウスケ「士・・・。」

士「っ・・・、悪い。ひとりにしてくれないか？」

夏海「で、でも!!!」

夏海は今の士を一人にしたくはなかった。

誰か傍に・・・自分が傍にいてあげたい。そんな気持ちを強く抱いていた。

だが・・・それは断られてしまう・・・。

士「・・・っ、でてけよ。」

士が低い声で二人に言う。

夏海が何か言おうとしたが、それをユウスケがとめた。

ユウスケ「士、何かあったらすぐ呼べよ？」

士「・・・ああ。」

一人になる士。

まただ。

心が疼く。苛々する士。

士「俺の心は・・・何を求めてるんだ。俺はなんでこうも・・・くそっ!!」

拳をベッドに叩きつける。

結局自分は無力で・・・破壊者でしかないのだろうか。弱い・・・のだろうか。

そう考えてしまう自分が妬ましくて仕方がない。

士「・・・俺は。破壊者・・・なのか。」

『そう・・・お前は破壊者だ。それを受け入れる・・・』

士「・・・?!だれだ?!!!」

士がつぶやいた瞬間、何者かの声が聞こえてきた。

それに反応する士だが、姿が見えることはない。声だけが聞こえてくる・・・。

『鳴滝がなぜディケイドを恨んでいたかわかるか?』

士「・・・なんだっていうんだよ。」

『ディケイドがいることで。自分がディケイドだったことで。仲間の世界が消滅されてしまったからだ。』

士「・・・っ！」

『消滅・・・イコール破壊された。そして・・・自分自身も。』

士「なっ・・・！」

『我がいれば世界は救われるのだ。お前は破壊者として生きろ。』

士「・・・、破壊者・・・。」

『世界の破壊者はデイクイドだけだ。我がお前に新しい力を与えてあげよう。』

士「新しい力だ！？なんだ、それは・・・、ぐうあ・・・？！
！！」

士は何が起こったのかわからなかった。

自分の中に・・・まるで自分じゃないものが入ってきたような・・・
そんな感覚がした。

必死に抑え込もうとするが、その力はすさまじかった。

士「・・・うああああああああああああああああ！！
！！！！！！！！」

そんな士の叫び声が聞こえたのか、部屋にユウスケ達が入ってきた。

津上「士さん？！」

ユウスケ「士・・・？！どうしたんだ・・・！！！！」

士「・・・く、くるなあああああああ！！！！」

野上が士に近づこうとしたのを、五代が止めた。

野上「・・・五代さん・・・？」

五代「近づくと・・・破壊される。」

ユウスケ「・・・え・・・」

五代「・・・そんな感じがする。」

夏海は必死で何かを抑え込もうとしている土に近寄る。

五代「夏海さん！！だめです！戻って！！！！！」

五代のその声も無視して・・・。

夏海「土くん！！私ですよ！ナツミカンですよ・・・！」

土「く、くるな・・・！！俺は・・・うあああああああああ
ああ！！」

「バシッ！！」

夏海「きゃっ！！！！」

土は近寄ってきた夏海を力いっぱい殴り飛ばしてしまう。
それを受け止めたユウスケは意思を固めていた。

ユウスケ「（俺が土を止める番だ。）」

五代「ここは危険だ。とりあえず避難した方が・・・」

ユウスケ「俺は残ります、五代さん。」

五代「小野寺くん？！」

ユウスケ「・・・土が壊れたら・・・俺が止めなきゃいけないんです。」

海東は焦りながらも相手の弱点を見つけていた。

DED「世界の創設者、といったね。」

FOUND「言ったが？」

DED「もう君の弱点を発見済みだ。」

FOUND「ほう。それは一体何だ？こちらとしても気になることだな。」

DED「簡単に言っと思ったかい？・・・はっ！！」

海東は相手の武器である剣を奪おうと試みていた。

その剣さえ奪えれば・・・！！

FOUND「ほう。そうきたか・・・。だが、から空きた。」

「FINAL ATTACK RIDE FOUND!!!!!!」

DED「・・・?!」

（大きな爆発音）

暗転

To be continue...

第十六話　ディエンドVSファウンド　そして破壊者（後書き）

お待たせしました！！！！

・・・だいぶ待たせてすみません（汗）
がんばりました！（爆）

・・・次回・・・もまた遅れそうですね（汗）
早めに更新できるように頑張りますね！！

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十七話 デイクイド激情態（前書き）

- ・ここでの激情態は「破壊者・デイクイド」をあらわす。
（正気じゃない状態のことを言っています）
- ・仮面ライダーファウンドⅡ最強
- ・海東は不死身すぎて、危ない

世界の破壊者デイクイド。

ライダー大戦の世界をめくり、その瞳は何を見る？

第十七話 デイクイド激情態

士の”目”が変わった気がした。

いつもの彼の目ではない。

『触れたものすべて破壊する』と言われているような・・・そんな瞳をしていた。

士「うあああ！！！」

ユウスケ「士！！！」

ユウスケが飛び出す。そして土ごと外へと駆け出した。

ユウスケ「・・・俺がお前を止める！・・・変身！！！」

ユウスケは仮面ライダークウガ アルティメットフォームへと変身した。勿論自我はある。

それを見た士（破壊者）は、ニヤツと笑いデイクイド激情態へと変身した。

DCDG「俺に触れるものはすべて破壊してやる・・・！」

Uクウガ「士！正氣に戻ってくれよ！！！」

士が攻撃を仕掛けてくるのを必死に受け止めながら、少しずつ距離を縮めていくユウスケ。

そして、右腕に力を込め士の体に向かって殴った。

だが、それをあっさりと受け止められそのまま蹴り飛ばされてしまった。

ウクウガ「うあっ!!さすがだな・・・強い・・・。でも・・・負けるわけにはいかないんだ!!」

この戦いを夏海は遠目から見ていたが、この光景を見ていられなかった。

夏海「・・・もし・・・ユウスケが・・・!!」

最悪な場合を考えてしまい、必死で頭の中で否定しようとしてもなかなか消えてくれない。

ただでさえ今の士の状態も気になるのだ。
あんな士を見たのも初めてで・・・。とうとう破壊者と化してしまったのか・・・。

夏海「士くん・・・!!」

戦いは未だデイクイド優勢。ユウスケは窮地に陥っていた。
しかし、なぜかわからないが心の中は冷静を保っていた。
士を救いたい、その思いだけが増してくる。

ユウスケ「俺がここで諦めたら・・・士はどうなるっていうんだ!!俺はあきらめない!俺は・・・士の笑顔も守らなきゃいけない・・・!!」

「FINAL ATTACK RIDE」

ウクウガ「これで終わらせようってか・・・!俺だって!!!!はあああああ!!!!」

「DECADE!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!!」

（大きな爆発音）

夏海「・・・土くん!!!! ユウスケ!!!!!!」

海東はぼろぼろになりながらも、逃げ切っていた。

海東「はぁ・・・インビジブルのカードがあつてよかったよ・・・」

「

攻撃が直撃する前にそのカードを作動させて、逃げていた。

海東「それにしても・・・弱点・・・ではなかったということか。だったら・・・ファウンドの力は・・・」

海東はファウンドの能力を分析して、彼が持つ剣を奪えば能力が無
力化される、と考えていた。

しかしドライバーが変形し・・・そのまま弾き飛ばされるとは思っ
てもいなかった。

海東「（ドライバーが変形するだ?!）」

ファウンドの力はきつと単体で倒すことはまず無理だろう。
だが、海東は考えていた。『士のあの力を使えば…』と。

夏海がゆっくりと目を開けると、目の前には士を抱えているユウスケが立っていた。

その姿を見て涙を流す夏海。それを見て微笑むユウスケがいた。

士が目を覚ました。

あたりを見渡すと、目を赤くした夏海とそれを支えている、体中に傷をつけたユウスケがいた。

士「……俺はいつたい……？」

ユウスケ「……やっぱり覚えてないんだな。俺もそうだったけど……。」

士「……まさか……。」士は傷だらけのユウスケを凝視する。

その視線に気づいたユウスケは何も言わずに微笑んでいた。

ユウスケ「士は何も気にしないでいいよ。大したことないし、それに……俺クウガだし！」

士「俺は……お前を……？」

ユウスケ「だからさ、士。今は体を休めて……最後の闘いに備えようぜ。」

士は自分がユウスケを攻撃したことを悟った。自分にも自我がなくなる……その恐怖心が自身の心を埋め尽くしていた。

ユウスケ「土が落ちてるなんて・・・らしくないぜ。落ちてるのはいつも俺の役目だろ？それに・・・夏海ちゃんがすごく心配してるし。」

夏海に視線を移す土。

土「・・・夏海。」

夏海「・・・つ、つかさくん！！！！」土に抱きつく夏海。それに驚く土。

土「な、ナツミカン？！！！！」

夏海「・・・もう・・・戦わないで。」

土「・・・え？」

夏海「・・・もう土くんが傷つくところなんて見たくないんです・・・。」

土は押し黙る。

夏海は涙を流しながら土に訴えている。届かないとわかっていながらも・・・。

夏海「もうディケイドとして闘わないでください・・・！」

To be continue...

第十七話 ディケイド激情態（後書き）

仮面ライダーファウンドについて話すのを忘れていたので・・・

仮面ライダーファウンド：世界の創設者が変身した姿。

彼が持っている力はすべてのライダーの
必殺技を

という

彼が持つ剣を使って編み出すことができ

最強中の最強のライダーである。

また、一度受けた力を体に吸収させるこ

ともできる。

カードを使うところなどはディケイドラ

イバーの

力と似ているが、決定的に違うことは

そのドライバー自体が変形し、攻撃でき

ること。

技などについては、出てきたときに説明します。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第十八話 士の決心、複雑な気持ち（前書き）

・士は立ち直りが早いみたいです。

25話完結の形が見えてきました。

25話＋エピローグって感じになると思います。

個人的に、ここの話書いてて楽しかったですw

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十八話 士の決心、複雑な気持ち

夏海が士に叫んでいる……。

それを遠目で見つめている渡達原典ライダー……。

夏海「無駄だつてわかってます……！でも……！！もう士くんが傷つく姿を見ていられないんです……。」

士「夏海……、悪いが……それは無理だ。」

夏海「士くん……。」

士「よくわからないが……、俺にはまだしなくちゃいけないことが残ってるらしいからな。」

そう言いながら、士はユウスケ、渡、剣崎に視線を向けていく。

士「俺ばかり、落ちてるわけにもいかないみたいだし……な、ユウスケ。」

ユウスケ「おう！士らしくねえぞ！！」

士はゆっくりと立ち上がる。

士「……で、その『世界の創設者』についての情報が知りたい。どうしたら勝てる？」

渡「それは……。」

剣崎「海東大樹ならわかるだろう。あいつ、戦ったはずだからな。」

士「戦った？……一人でか？！」

渡「……ええ。でも……彼にはインビジブルのカードがあるはずなので大丈夫だとは思いますが……。心配ですね。」

野上はまだ泣いている夏海を見て悟った。

本当に土さんのことを心配しているんだ、と。
後悔もあるのかもしれない。知らなかったとはいえ・・・自分もまた土さんに攻撃してしまったから。

野上「と、とりあえず、城の中に戻りませんか？海東さんが戻ってきてるかもしれないですし・・・。」

ヒビキ「それもそうだなあ。」

天道「・・・俺たちは間違っていたというのか？」

ヒビキ「いきなりどうしたの？」

天道「・・・いや、ディケイドを倒そうとしていたことは。間違ってたってことなのか？」

剣崎「・・・間違ってたわけじゃない。世界を救う方法に・・・それしか思い浮かばなかっただけだ。」

士「・・・まあ・・・、俺が破壊者なのは本当だからな。」

剣崎「・・・土。悪かったな、いろいろ。」

士「・・・何今更謝ってるんだよ、俺は別に何も気にしていない。」

五代と渡は顔を見合わせていた。

勿論士の立ち直りが早いということに驚いていたのである。

渡「・・・土さん・・・もう立ち直ってますね。」

五代「すごいなあ・・・。仲間ってやっぱり最高なお宝なんだねえ・・・って。海東くんみたいになっちゃった。」

士達が城に戻ると、城戸が海東と口論になっていた。

城戸「俺はそんなの認めないぞ!!」

海東「だが、これしか方法がないんだ。・・・あ、士!!」

士「海東、ぼろぼろだな。」

海東「ふっ、君もね。」

渡「一体どうしたんですか？」

渡は口論になっていた原因を聞きだす。

城戸「だってこいつが……！創設者に勝つ方法は一つしかないって言うて……！それで……！！！」

剣崎「とりあえず、お前は落ち着け。……海東、それは一体何なんだ？」

城戸では冷静に話が進まないと思ったのか、剣崎は海東に聞いただす。

海東はため息をひとつついて、土を見た。

士「……？」

海東「世界の創設者に勝つ方法は……今のところ一つしか思い浮かばない。」

士「……俺なのか？」

海東「ああ。だけど……今の土じゃ無理なんだ。」

海東がうつむきながら、少しずつ話していく。

その様子から、勘がいい渡や五代、そして土は何となくわかってしまった。

士「つまり……俺に激情態になれってことだろう？」

ユウスケ「……？！！！」

海東「……はあ。やっぱり士にはわかつちやったか。そうだよ。破壊者として目覚めれば……勝てると思うんだけど……。」

城戸「そんなの……！駄目に決まってる？！」

士「・・・城戸。」

城戸「だって・・・。そんな姿にまたなったら・・・今度こそ壊れちゃうかもしれないんだぞ?!これ以上・・・犠牲を出したくないんだよ・・・。」

城戸が涙をひとつ流す。夏海も泣きそうだ。

五代は他にも方法がないか渡と話し合っていたが、すぐに出てくるようなものでもない。

津上と乾は心配そうな視線を送り、野上はヒビキに支えられていた。天道は悔しそうな表情をしていた。剣崎も・・・同じだ。

だが、士だけはすっきりとした表情をしていた。その表情を見たユウスケは嫌な展開が頭をよぎる。

ユウスケ「・・・そこまでしなくちゃ、創設者には勝てないってことなのかよ。」

海東「ああ。あいつの力は・・・並大抵のものじゃない。隙がない。最強のライダーって言っても過言ではないよ。」

ユウスケ「・・・俺の究極の闇の力じゃだめなのか？」

五代「小野寺くん!!!!!!」

海東「・・・それは・・・。」

ユウスケ「士だけ壊れるなんて・・・俺は見たくない。」

ユウスケの表情は本気だった。だがそれを止めたのは士自身だった。

士「ユウスケ、もういい。」

ユウスケ「なんでだよ!!」

士「もうこれ以上お前に迷惑かけたくないからな。」

ユウスケ「仲間なんだから、迷惑かけて当然だろ?!」

夏海「・・・土くん・・・考え直して・・・。」

士「・・・すまん、ナツミカン。」

渡「・・・士さん。本気なんですね？」

士「ああ。・・・今度俺が壊れたら、本気でつぶしてもらって構わねえよ。創設者さえ倒せばいいんだろ？」

渡「・・・ええ。ですが・・・」

士「・・・俺もいなくなつたほうが世界にはいいつてもんだ。」

士の意志は固かった。渡達はどうかして彼の意志を曲げようとしたが・・・無理だった。

士「・・・俺は激情態になる。そして・・・世界の創設者を破壊してやる。」

T o b e c o n t i n u e ...

第十八話 士の決心、複雑な気持ち（後書き）

うーん・・・。

前書きにも書いたように、この小説は25話で完結します！
あと少しですねー・・・。

最終的に、gdgdな小説にならないように頑張らないと！

あ、リイマジライダー出します！（爆

最後の方だけなんですけど・・・出します！！

これだけ予告しておこうと思って・・・（笑

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第十九話 いざ、最終決戦へ・・・（前書き）

なんていうのか・・・土って弱いのか強いのか
わからなくなってきたております。

いや、強いとは思うんですが・・・。自分が書く土は
基本弱っちいんですよね・・・

まあ・・・とりあえず十九話です。どうぞ。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第十九話 いざ、最終決戦へ・・・

部屋の中は騒然とした状態となっていた。

渡や乾、ヒビキ、五代はもう何を言っても彼の意志は変わらないと思っていたから、特に何も言わなかったのだが、野上や城戸、ユウスケ、夏海などは必死に彼を止めようとしていた。

「破壊者」・・・ディケイド激情態となることを。

夏海「士くん！考え直してください！！」

士「だったら・・・。他に何かいい方法があるのか？世界の創設者を倒す方法が・・・世界を救う方法が！！」

夏海「それは・・・その・・・！」

士「・・・なら俺がやるしかない。俺がやらなきゃ何も始まらない！世界が終わるだけだ。」

城戸「・・・ちつくしょう！！なんか他にいい方法がねえのかよ！！くそお！！」

剣崎や天道はその様子をじっと見つめていた。

彼らもまた・・・何かほかの方法を探しだそうとしているのである。

剣崎「・・・士、お前・・・今度歯止めが利かなくなった時はどうするつもりだ？」

天道「俺に戦いを挑んできた場合は容赦なく倒すぞ？」

士「ああ、それでいい。」

ユウスケ「士？！お前・・・何言ってるんだよ！！！」

士はユウスケのほうを見なかった。

戦いに備えるために、ヒビキや津上に傷の手当てをお願いしようと

していた。

そんな様子を見たユウスケは土に訴えようとした・・・その時。

夏海がユウスケの前にたった。

ユウスケ「・・・夏海ちゃん・・・。」

夏海「土くん・・・。どうしてあなたは・・・どうしてあなたはいつも自分の心配をしようとしなんでしょうか！！！」

土「・・・。」夏海の声に土は足をとめた。

夏海「周りの心配ばかりして。世界のことばかり・・・私たちのことばかり・・・！少しは自分のことだって心配してください・・・。」

土「俺はどうだっていい。俺には自分の世界が見つからないからな。」

夏海「でも！」

土「お前らには帰るべき世界があった。それなのに・・・俺やその創設者のせいで世界が消滅されてしまったり・・・消滅されようとしている。だったら俺がけじめつけるのが当然だろ。」

夏海「・・・そんなの・・・！そんなの間違ってます！！！」

土「どこが間違ってるっていうんだ。」

夏海「・・・それは・・・。」

土「俺が言ったこと・・・間違ってるか？」

ユウスケ「・・・間違ってる。」

土「・・・。」

ユウスケが夏海の隣に立つ。

ユウスケ「土は間違ってる。お前は・・・お前は一人で戦おうとしてないか？一人で向き合おうとしてないか？・・・一人で背負いこもうとしてないか・・・？俺達・・・仲間だろ？仲間なら一緒に戦

うのが当然だし・・・みんなで背負いこむのも当然だ。・・・少しは俺らを頼れよ。」

士「・・・ユウスケ。」

ユウスケ「やっぱりお前だけに嫌な思いをさせるわけにはいかないよ。」

士「究極の闇になるつもりか？」

ユウスケ「・・・ああ。」

士は今まで彼らに背を向けていたが、振り返りユウスケの目を凝視した。

彼の目・・・ユウスケの目は・・・『本気』をあらわしていた。しかし、士は否定した。

士「だめだ。」

ユウスケ「・・・なんでだよ」

士「お前までなったら・・・俺を止める奴がいなくなるだろ。」

ぼそつとそう呟いて士は部屋を出て行った。

ユウスケはその場所に立ち尽くしている。

天道はあきれた表情をしながら「結局は生きたいということだ」とつぶやいていた。

ユウスケ「・・・士・・・。」

その日の晩、渡と剣崎は士を呼び出していた。

士「・・・なんだ、頼みごとってのは。」

剣崎「悪いな、いきなり。」

士「いや・・・別にかまわん。」

渡は士に一枚の紙を差し出した。

そこに書かれていたものを見て、士は驚愕した。

士「・・・これは・・・!」

渡「僕たちが必死に考え抜いて答えを出した結果です。あなたには『これ』を約束してもらいたい。」

剣崎「これしか・・・思いつかなかったんだ。」

士「・・・ちつ。」

士はその紙を手で握りつぶした。

渡はその様子を見て、ため息をひとつついた。

渡「やっぱり・・・だめですか。」

士「俺はもう決めたんだ。あんたはわかってると思ってたけどな。」

渡「すみません。今まであなたにしてきた罰を少しでももって・・・」

士「罰?・・・お前、そんな風に思ってたのか。」

渡「・・・はい。」

士「・・・ったく。リーダーのお前がそんなだからまとまらないんじゃないのか?」

渡「承知してます・・・。」

剣崎「おい、あんまり渡を責めるなよ。」

士「責めてはいない。からかってるだけだ。」

剣崎「・・・一緒だ!!!」

渡達の頼みごと。

それは『ディケイド激情態にならずに戦ってはもらえないだろうか』
というもの。

その紙には彼らが考えに考えた他の方法が並んでいた。

士「・・・ちよつとまで。 ってことは俺が出会ったライダー達はま
だいるっていうのか？」

渡「・・・ええ、あなたには黙っていましたか。」

士「はあ。 お前、もっと早く言えよ、それ。」

士は渡の行動の遅さに呆れかえっていた。

だが、そうこうしている場合ではない。

戦いはもう目の前まで来ているのだ。

士「・・・さて、そろそろ暴れるとするか。」

そして、最終決戦が幕を開ける・・・

T o b e c o n t i n u e ...

第十九話 いざ、最終決戦へ・・・（後書き）

なんていうのかなあ。

やっぱり士は自分のことも考えてるというかなんというか。
結局は彼も一人の人間なわけで。

でもやっぱり自分のことよりも仲間のことを大事にしてる
ってところも、TV版最終回に近づくにつれて垣間見ることができ
ますよね。

そういうところが出せていればいいな、と思っております。
それでは、第二十話で会いましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

第二十話 「破壊者」覚醒（前書き）

DVD見ながら書いているので、

文章がばらばらな気がしています（ ）

まあ、流れる的にできていればいいかな（笑

それでは、二十話です。

ちなみに五代クウガは「G/U/クウガ」と表記してます。
ユウスケのクウガはそのまま「クウガ」の表記です。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二十話 「破壊者」覚醒

そして、士たちは「世界の創設者」を呼び出すことに成功し、決戦の 때가 来た。

渡「士さん、いいですか。最初からなろうと思わないでくださいよ？」

士「・・・俺もいつなるかわかんねえんだよ。」

渡「・・・え？」

士「前回も、・・・急になったんだ。」

剣崎「・・・ちっ、面倒だな。」

士たちが歩いていくと、荒野の真ん中に一人の男が立っていた。海東は反応した。その反応を見てここにいる全員が理解した。

『あれ』が世界の創設者なんだと。

創設者「・・・きたな。」

士「お前が世界の創設者とかって奴か？・・・不気味な格好をしてやがるな」

創設者「そうだ。・・・我の姿を見たものは誰もいない。」

士「・・・そうかよ。だが・・・そんなことは関係ない。さっさと片付けてやるぜ」

「KAMEN RIDE」 士「変身！」 「DECADE!!」

創設者「・・・ほづ。・・・いつ覚醒するか見物だなあ。」

「KAMEN RIDE」 創設者「変・・・身。」 「FOUN

D!!」

海東「じゃあ、僕らも行くか。」

ユウスケ「ああ!!」

「KAMEN RIDE」

全員「変身!!」

士たちは創設者の攻撃に翻弄されていた。

DCD「ちくしょう!こいつ、ふざけてやがる!!」

DED「油断も隙もない……。こちらも気を引き締めていかなないとね。」

クウガ「そうだな!超変身!!」

クウガはアルティメットフォーム(赤目)へと変身した。

原典ライダー達は最終形態へと変身。夏海は遠目から士たちの様子を見ていた。

夏海「・・・土くん!!!!」

龍騎S「うあああ!!!!」

変身がとけ、倒れこんでしまう城戸。

剣K「城戸!!!!ぐあああ!!!!」

それに気をとられてしまい、ファウンドの攻撃をとめることができ

ず、変身も解けてしまっ。

FOUND「ふっ。お前らライダーたちの力はそんなものか。大したことないな。」

剣崎「ちっ……！（体が思うように動かない……！）」

天道はハイパーゼクターを使い、少しでも攻撃をとめようとした。

カブトH「ハイパークロックアップ！」

FOUND「無駄だ。」

「ATTACK RIDE HYPER CLOCK UP!!」

ファウンドもまたハイパークロックアップの世界へと消えた。

その間に、ヒビキに守られていた野上やそのヒビキに攻撃しながら。

電王「うわぁ……！」

響鬼「うお……！」

キバE「良太郎くん！ヒビキさん……！」

良太郎は気を失い、ヒビキは変身は解けなかったものの、息が上がっている。

「CLOCK OVER」「CLOCK OVER」

カブトH「……くっ……！！！」

FOUND「カブト……。お前ならもつと我と遊んでくれると思っただがなぁ。」

ファウンドはそのままカブトの首を絞め、そして投げ飛ばした。

カブトH「うああ！！！」

そのまま変身がとけてしまった。

キバE「っ！！天道さんまで・・・！！！」

キバット「渡、俺たちも行くぜ！」

キバE「・・・ああ！」

キバット「タツロット！」

タツロット「ウェイクアップ！フィーバー！！！」

キバE「はああああああああ！！！！！！！」

FOUND「無駄だ！！！」

「ATTACK RIDE FREEZE！！！」

キバE「・・・え？」

キバット「や、やべっ！！！」

キバE「うわああああ！！！」

G/U/クウガ「渡さあん！！！！！」

《大きな爆発音》

キバの変身が解けてしまい、倒れこむ渡。

その近くにはほかのライダー達が倒れこんでいる姿が五代には見えていた。

今はユウスケや海東、そして士が3人がかりで戦っていた。

五代「（俺も・・・みんなの笑顔のために！！）士くん！大丈夫か？！」

DCD「・・・、五代か・・・！あいつ・・・隙がねえ。」

G/U/クウガ「ええ……。厄介なカードを持っているようですし。」

Uクウガ「……じゃ、じゃあ！俺らどうすれば……！」

DED「話している場合じゃないよ……！！ぐあ……！」

DCD「海東……！すまん……！」

夏海はただ祈っていた。

士が「破壊者」に覚醒しないように……。

自分はまともに戦うことはできない。だから祈ることしかできない。

夏海「士くん……ユウスケ……大樹さん……五代さん……！！」

DCD、DED、G/U/クウガ、Uクウガ「うわあああああ……！！！！」

彼女の祈りも届かず、一方的にやられるだけの士たち。

そのまま変身も解けてしまった。

響鬼「だ、大丈夫かあ……！」

五代「ヒビキさん……！ヒビキさんこそ、平気……じゃないようですね。」

響鬼「ああ……さすがにね、ちょっときつい。」

ユウスケ「こそ……！」

FOUND「……やはり、普通の状態では私の遊び相手にはならないようだ。」

士「……っ……！」

海東「士、だめだ……！あいつの話を絶対に聞くな……！」

FOUND「……ほう。ディエンド……世界の修復者は望んで

いないのか？我を倒し・・・世界が救われるのを？」

海東「そ、それは・・・。」

FOUND「我を倒すことができるかもしれないのは。そやつが破壊者となるしかないのだ。我もそのほうが面白く戦えるからなあ。」

ユウスケ「土・・・。」

ファウンドは遠くで見ている夏海に視線を移した。そして、ニヤリと笑った。

その笑いに気づいた五代は、夏海に向かって叫んだ。

五代「夏海さん！！逃げて！！」

夏海「え・・・?!」

FOUND「・・・きつと。こうすれば覚醒するだろうな。」

海東・五代「やめろ！！！！」

土は何が起きているのか一瞬わかりかねた。

だが、ファウンドが立ちすくんでいる夏海のほうへ向かっているのを見て・・・。

彼の心の中が・・・何かうごめいた。

土「や、くっ・・・!!」

ユウスケ「土・・・?」

FOUND「こい、破壊者ディケイド。早くしなければ、この女が消滅してしまうぞ。」

夏海「・・・!!っ、土くん!!助けて・・・!!!!」

夏海の叫び声がする。

・・・あれ、俺はなぜ動かないんだ・・・?

・・・俺は・・・いつたい・・・誰だ・・・?

FOUND「さようなら、お嬢さん？」

夏海「ひっ！いや！！！！！」

ヒビキや五代、海東が夏海を助けようと走っていくが間違いなく間に合わない。

ユウスケは土の様子にあせっていた。

ユウスケ「土・・・！正気に戻れ！！！」

FOUND「そして、破壊者ディケイド、こんにちは・・・。」

ファウンドが夏海に向かって剣を振り下ろした・・・いや、振り下ろされることはなかった。

夏海が目を開けると、目の前には土が立っていた。

夏海「・・・っ、土くん・・・？」

土（破壊者）はニヤツと笑い、その剣を押し返した。

FOUND「・・・ほう。ようやく私の遊び相手ができたなあ。」

海東、ヒビキ、五代、ユウスケ「・・・！？」

夏海「・・・土くん・・・！」

土「俺は破壊者、悪魔だ。俺に触れるものはすべて破壊する・・・。」

T
o
b
e
c
o
n
t
i
n
u
e
:

破壊者
覚醒
・
・
・

第二十話 「破壊者」覚醒（後書き）

今までで一番長文になった気がします。
覚醒しちゃいましたよー。

もうね、次回の話をはやく
更新したくてたまらないんです（爆
もしかしたら、今日の夜に衝動的に
更新している可能性が（笑

それでは、次回もお楽しみに！（駄文を）

すべてを破壊し、すべてをつなげ！

第二十一話 土を止める！（前書き）

なんかこんなタイトル何かにありそうですね（笑

今回はとにかく暴走した土を誰か止めてくれ！って話です。

まあ、簡単に言えばそういうことです！！

ユウスケって五代さんと一緒に偉大だなぁって

思いますよ、ほんとに・・・（本編では情けない役になってたけど）

それでは第二十一話です！どうぞ！！

（ディケイドB ディケイド BREAKERの略です）

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二十一話 士を止める！

士にととう「破壊者」が覚醒してしまった。

だが今はまだいい。彼の眼には「創設者」しか映っていないからだ。

渡「・・・この光景、敵が違いますけど以前の闘いで見たことがありますね。」

そう渡がつぶやいた。

五代は思い出していた。その時の闘いのことを。

自分は最後まで戦わなかったけれど、今の状況は・・・

五代「（同じだ。あの時も夏海さんに危害が加わって・・・。）」

剣崎「あいつが、こちらに視線を向けたとき。俺らはどうするんだ？」

天道「決まってるだろう。倒す。それだけだ。」

城戸「待ってくれよ！！あいつ、絶対に前回よりも強くなってるんだぜ？！前回もボロボロだった俺らが・・・今勝てるわけないじゃないえだろ？！」

天道「そんなこと言ってるが、お前はあいつに情を持ったんだろう？だから倒せない。だからお前は甘いんだ。」

城戸「うるせえ！大体・・・ライダー同士がつぶし合うこと自体間違ってるんだ。俺の世界も・・・そうだった・・・！俺は、人間と闘うためにライダーになったわけじゃない。モンスターから人を守るためにライダーになったんだ！」

剣崎は思った。城戸は優しい。優しいからこそ破壊者とか関係なしにそういうことを言えるのだと。

破壊者でも・・・一人の人間には違いないのだから。

津上「皆さん！」

天道「津上、おまえどこに行ってたんだ？」

津上「野上さんを運びに城へ・・・、ヒビキさんも一緒です。」

乾「で、どうだ？状況は。」

渡「士さんが破壊者へと覚醒しました。」

乾「・・・そうか。海東たちはどうした？」

五代「あそこにいます。」

五代が指をさした場所。

それは士と創設者が対峙しているすぐ近くだった。そこには海東、ユウスケ、そして夏海もいた。

それを見た乾は驚いた。

乾「馬鹿！ライダーになれるやつはまだしも、なんで光夏海まであそこにいるんだよ！」

五代「一歩も動こうとしなかったんです。危ないから城に戻りましょうって俺が言ったんだけど、無視されちゃった。」

城戸「それに一応あの子もライダーになれるみたいだけど？」

乾「キバーラの消息がつかめない中、無理に決まってるだろうが。」

キバット「そういえば見えないな、渡、俺ちよつと探してくる」

渡「え、ちょ！キバット？！」

天道「・・・自由だな。」

ディケイドとファウンドの闘いは互角、いや、少しだけディケイドがおしているようにユウスケ達には見えていた。

ファウンド「・・・っ、なかなかやるな。」

ディケイドB「ふん！お前の力はこんなもんなのかよ！！」

「ATTACK RIDE SLASH！！」

ディケイドB「うるああ！！」

ファウンド「ぐうっ！！」

ユウスケは目を見開いて驚いていた。

今まで全く歯が立たなかった攻撃が、土が破壊者になったことでファウンドの体につけることができているのだ。

そしてファウンドは息が上がっているのに対して、ディケイドは全く上がっていない。寧ろ笑っているように見える。少しだけ恐怖を感じた。

ユウスケは思った。この土を止めることはできるのだろうか、と。

ディケイドB「もう終わりなのか？つまらないな。もっと俺と遊んでくれよ。」

ファウンド「ちっ。我はこんなことではくたばらん！はああ！！」

「ATTACK RIDE ONGEKI BOU - REKKA！」

「ATTACK RIDE STEAL VENT！」

ファウンド「な、なんだと？」

ディケイドはスチールベントで音撃棒 烈火を奪い取った。それを遠くへ放り投げ、カードをドライバーに差し込む。

ディケイドB「終わりにしようぜ？」

「FINAL ATTACK RIDE DECADE BREAKER!!」

ファウンド「くっ!」

「FINAL ATTACK RIDE FOUNDED!!」

大きな爆発音

海東らが爆風をよけ、静まったところで目を開けると・・・
ディケイドがこちらを見ていた。そしてにやりと笑いながら
ディケイドB「今度はお前らが相手か？」
と言った。

海東「くっ!小野寺くん、ナツメロンを遠くへ!」

ユウスケ「海東は?!」

海東「少しでも足止めする!」

ユウスケ「だけど!!」

夏海「私はここにいます!ここに残ります!」

海東「ナツメロン!何言ってるんだ・・・!」

夏海「・・・私が土くんを止めるんです。止めなきゃいけないんです!」

その騒ぎを聞きだしたのか、原典ライダー達も集まってきた。

天道「やはり、きたか。破壊者・・・ディケイド。お前は俺が倒す。

「
ディケイドB「ほう。カブトか。かかってこい。」
城戸「や、やめろよ！お前らー！」

ディケイドB「お前は龍騎だったか……。二人がかり、いや、三人がかりでもいい。誰でもいい。俺と遊べよ。ニヤッ」
海東「僕が行く。士、覚悟したまえ。」

夏海「……。やめて！士くん……。！」
ユウスケ「……。士……。お前……。本当に……。」

ユウスケ達の目の前で今から起ころうとしていること。
これこそが「ライダー大戦」ともいべき戦いであろうか……。

夏海は見ていられなかった。夢と同じ……。いや、以前のライダー大戦と同じ。

「夏海「（どうして……。どうしてこうならなければいけないの？）」
」

創設者はこの光景を笑いながら見つめていた。

創設者「我をここまで追い詰めさせるとは。あやつ力は本物だということだな。」

そして視線を夏海に向ける。

彼にはひとつ、疑問に思っていることがあった。

『なぜディケイドはこの女に執拗に執着するのであるのか』ということ。

創設者「人間といういきものは誰かと助け合いしなければ生きていけない、ということか。あやつにとって、そこまでも思わせるこの女の魅力はどこにある？」

破壊者デイケイド。

彼を止められるのは、誰だ・・・

T o b e c o n t i n u e . . .

第二十一話 土を止める！（後書き）

やっぱりこの日のうちに更新してます

二十一話。いかがでしたでしょうか。

個人的にはすごく荒々しい表現になってしまったかな、
とっているんですが……。どうでしょう？

戦闘シーンは難しいですね……。がんばらないと！

では、また次回お会いしましょう！

全てを破壊し、全てを繋げ！！

第二十二話 ひとつの声（前書き）

なんていうのか。

こういう展開になるのを自分でも予想していなかったというか。

まあ。とりあえず二十二話ご覧ください。

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二十二話　ひとつの声

そこからの展開は目に見えていた。

ライダー達は土（破壊者）にことごとく倒されていった。

なんとかしてディケイドをとめなければ！と考えている五代や渡だった、突破口が見出せない。

そんなとき、ユウスケは突拍子もないことを言い出した。

そして、失敗すれば自分にも大きなダメージとなるような・・・。

ユウスケ「俺があいつをとめます。」

五代「ユウスケくん・・・どうやって？」

ユウスケ「もちろんクウガで、ですよ？俺の命に代えてもあいつをとめない！・・・あいつしか創設者を倒せないんだから。」

創設者を倒すには確かにディケイドの力が必要だ。

でもそれは・・・『破壊者』としてのディケイドなのではないか・・・と思った渡。

だが目の前の男は「とめる」と断言している。
自分たちが躊躇している中・・・。

渡「一人では無謀です！僕たちも・・・」

ユウスケ「いえ、俺だけで十分です！」

ユウスケはクウガに変身し、ディケイドの元に走って行ってしまった。

渡と五代も考えているだけでは埒が明かないと考え、二人もディケイドの元へと急いだ。

夏海はただ呆然としてのことしかできなかった。

士を救いたい、でも自分にはその力を持っていない……。

キバーラの姿も見えないし、生身の人間が近くに行っではいけないことくらいわかる。

ただ祈ることしかできない。無力の自分には……。

そのとき、夏海の前にユウスケの姿が見えた。ユウスケは士を救うことができる……。

夏海「私には……何かできることはないんでしょうか……。見ているだけなんて……。」

DCD・B「……偽者が。」

ユウスケが変身したクウガを見てそう呟くディケイド（破壊者）。それに反応したのが五代だった。

G/U/クウガ「小野寺くんは偽者なんかじゃない！」

DCD・B「所詮パラレルワールドの人間だろ。」

ユウスケは特に気にしていなかった。

目の前にいるディケイドは士じゃない、と思っていたから。

とにかく士を取り戻せばいい、それだけがしなければいけないことなのだ。

まだ近くには創設者だっている。だが今の状態ならまだ攻撃してくることはないだろう。

ディケイド（破壊者）から受けた攻撃がまた癒えていないからだ。

クウガ「士！！はやく戻ってきてくれ！！お前がするべきことはこ

んなことじゃないはずだ!!」

DCD・B「うるさい。これでもくらっとけ。」

「ATTACK RIDE ONGEKIBOU・REKKA!!」

DCD・B「ハアアア!!」

クウガ「うわああ!!」

思い切り跳ね飛ばされてしまうユウスケ。しかしすぐに体勢を立て直し、再び突っ込んでいく。

キバE「小野寺さん!やみくもに突っ込んでいくだけでは傷つくだけです!」

カブトH「そうだ!少しは整えてから・・・」

クウガ「だめなんです!それじゃあ士は戻ってこない!・・・俺が、俺があいつをとめなきゃいけないんです!!超変身!!」

ユウスケはアルティメットクウガへと変身し、ディケイドを攻撃する。

しかし、ディケイドはそれを難なくかわし、次のカードをドライブバーへと差し込んだ。

「ATTACK RIDE BLAST!!」

ユウスケはその何弾かが自分の体に直撃したが、もろともせずディケイドの体を殴っていく。

クウガ「はああ!!」

DCD・B「くっ!!やるな!!おりゃああ!!!!」

戦いはディケイド（破壊者）VS小野寺クウガの一騎打ちとなっていた。

ほかのライダー達は攻撃をできずにいた。この二人の気迫のせいで・・。

そのころ夏海はより近くへと近づいていた。

その後ろにはヒビキがスタンバイ。いつ何時創設者が行動を移すかわからないからだ。

ヒビキ「夏海ちゃん、これ以上前に行ったらだめだよ？」

夏海「そんな・・・！私だって土くんをとめられますー！」

ヒビキ「気持ちわかるよ。でも・・君が行ったら余計に小野寺君が負担になるって事、忘れちゃだめだからね？」

夏海「自分の身は自分で守ればいいんでしょう？」

ヒビキ「ちょ・・・！夏海ちゃん？！だめだってば！！（また剣崎くんに怒られちゃう・・・）」

夏海はどんどんディケイドとクウガの元へと近づいていく。

そして彼女の足が止まったとき。

「FINAL ATTACK RIDE DECADE BREAKER！！」

二人の必殺技が互いに決まった。あたり一面大きな爆発が起こる。夏海が少し体をすくめ、爆発がおさまったとき目を少しずつ開ける。すると目の前には倒れているユウスケとそれを見下ろすディケイドが立っていた。

夏海「・・・！！！！」

D C D・B「まだやるのか？」

ユウスケ「・・・くっ・・・、土ぁ・・・！俺は世界中の人の笑顔を守るって・・・クウガの世界でお前と、そしてあねさんと約束した・・・！だから・・・！！お前の笑顔だって・・・夏海ちゃんの・・・笑顔だって・・・、守らなきゃいけないんだ・・・！」

その必死の訴えに、ディケイドに異変が起きた。

D C D・B「くっ・・・！うぁ！！・・・やめろ！！！」

ユウスケ「・・・、土ぁ！！！！お前俺に言ってくれただろ・・・！俺の笑顔を守ってくれるって・・・！だから・・・！戻って来いよ・・・！！土！！！！」

D C D・B「うるさい！！！！やめろおおお！！！！うぁあああ！！！」

その様子を目にした夏海も、ディケイドに訴える。

夏海「土君！！私は・・・！土くんが破壊者じゃないって・・・信じます！絶対に・・・！！だから・・・！！土君！！！！・・・世界を・・・世界を救ってください！！！！」

ユウスケ「土！！！！」

夏海「土君！！！！！！！！！！」

D C D・B「うぁあああああああああ！！！！」

ディケイドが変身するとき、倒れこむ土。それを支えにいく夏海・・・。

ユウスケも土の下へ近づいていった。

夏海「土君・・・！」

士「・・・な、ナツミカン・・・？」

ユウスケ「士！！」

士「・・・ユウスケ・・・、俺・・・何を・・・。」

夏海「よかった！！士君！！！！」（抱きしめる）

士「うお！！な、なんだなんだ・・・！！（／／／／／）」

ユウスケ「つかさああああああ！！（号泣）」

士「・・・、迷惑かけたな。」

ユウスケ「何言ってんだよ！」

創設者「・・・結局正気に戻ってしまったというわけですか。」

士「、創設者！！」

創設者「・・・もう我に勝つことはできない！」

五代「それはどうかな？」

五代の声がする。

そのほうを見ると、五代の後ろには士たちが出会った8人のライダーが集結していた・・・

T o b e c o n t i n u e ...

第二十二話　ひとつの声（後書き）

さて、駆け足でお届けしています！

第二十二話！いかがでしたでしょうか？

えっと、時間がないので今回のあとがきは
これだけでご勘弁を（爆

すべてを破壊し、すべてをつなげ！

第二十三話 平成ライダー集結せよ（前書き）

結局出しちゃいましたよ・・・

もうごちゃごちゃしていますが、

許してください（汗

っていうか、あの・・・。

「ソウジってクロックアップの中から

出られないんじゃないかなったっけ」と

思った方は、そのこと無視してください（爆

（とりあえず、表記はいつものとおり

原典の場合は最終フォームの頭文字が

ライダーの名前の前や後についています。）

それでは、第二十三話をお楽しみくださいませ

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二十三話 平成ライダー集結せよ

士の前に見知った顔が8人並んでいる。

仮面ライダーアギト・・・芦川ショウイチ。

仮面ライダー龍騎・・・辰巳シンジ。

仮面ライダー555・・・尾上タクミ。

仮面ライダー剣・・・剣立カズマ。

仮面ライダーヒビキ・・・アスム。

仮面ライダーカブト・・・天童ソウジ。

仮面ライダー電王・・・モモタロス

仮面ライダーキバ・・・ワタル。

カズマ「チーズ！！チーズー！！！」（士に抱きついてくる）

士「お、おい！！カズマ、離れるー！！それからチーフだ！それにもう俺はチーフじゃねえ！」

アスム「士さん！師匠！」

海東「少年くん！」

ワタル「ユウスケー！！士さん！」

ユウスケ「ワタルー！！！」

感動の再会、といったところか。

その様子を微笑みながら見つめる夏海。

そしてモモタロスの姿を見て驚いている野上良太郎。

野上「え・・・？！な、なんでモモタロスが・・・？！」

モモタロス「はあ？！誰だてめーは！」

野上「え・・・！えつと・・・その・・・。」

海東「このモモタロスは君の知っているモモタロスじゃない。」

モモタロス「あ、てめーは！あの時の！！泥棒野郎じゃねえか！！」

タクミ「夏海さん！」

夏海「タクミくん！お久しぶりですね！！ユリちゃんは元気ですか？」

タクミ「はい！」

シンジはその様子を遠くから見つめていた。
それに気づいたソウジとシヨウイチが近寄る。

ソウジ「どうした？お前は行かないのか？」

シンジ「あ、どうも……。俺、タイムベントの関係で士しか存在を知られてないというか……。」

シヨウイチ「別にいいじゃねえか。」

シンジ「え？」

ソウジ「俺たちは仲間だ。それだけで十分だろう？」

渡「感動の再会も、どうやらまともにはしてもらえないみたいです
ね。」

渡がそうつぶやくと、ここにいる全員がその方向に視線を向けた。
そこには仮面ライダーファウンドが立っていた。

カズマ「なんだよ、あいつ！！」

シンジ「……敵……か？」

士「世界の創設者……ってやつらしい。」

カズマ「そ、創設者……？なんだそりゃ。」

士「お前らの世界、いや……すべての世界を創り出した奴だよ。」

あいつを倒せば、世界は救われるらしい。」

アスム「じゃあー！僕たちの仲間も元に戻るんですか？」

海東「・・・ああ。戻るさ。」

ワタル「なら、戦うしかないようですね・・・！」

ソウジ「・・・なんだか相手の様子が変だな。」

ショウイチ「天童もそう思うか？俺もそう思う。まあ・・・」

ソウジ「カブトの」ショウイチ「アギトの」

ソ・ショ「勘だけだな」

ユウスケ「・・・この二人、何気にいいコンビだな・・・」

士「とりあえず・・・、今は・・・創設者を倒すことだろ。」

士たちは創設者 仮面ライダーファウンド に視線を移した。

FOUND「我は貴様らごときに負けるほど弱くはない。」

士「この人数だぜ？お前に勝ち目はあるのかよ。」

FOUND「ふん。我の新的姿をお前に見せてやろう。」

「KAMEN RIDE FOUND FINAL!!」

士「ファイナルだと?!」

FOUND/F「ふははは！！この姿になったとき、お前らの負けが決まった。」

渡「そうとは限りません。僕たちは仲間です。仲間の力のすごさをあなたは何もわかっていないようですね・・・土さん！これを使ってください。」

士「・・・これは、鳴滝が持っていた・・・。」

渡は士に鳴滝の所持品であるひとつのカメラを差し出した。

渡「これを使えば、仮面ライダーディケイド・ファイナルになることができます。」

士「・・・なるほど。大体わかった。・・・お前ら、準備はいいか？」

ユウスケ「ああ！！いつでもいいぜー！！」

ほかのライダーたちも大きく頷いた。

士「それじゃあ・・・行くぜー！！」

「KAMEN RIDE」

「KAMEN RIDE」

キバット「渡、キバツていくぜー！」

キバット「ワタル、こっちもキバツていくぜー！」

ライダー達「変身ー！！」

「DECADE FINAL！！」

「DEENDー！！」

平成ライダーたちが一列に並んだ。

モモタロス「よっしゃー！！いくぜいくぜいくぜー！！！！」

先陣はモモタロス。その後ろには城戸が変身する龍騎やカズマが変身する剣が続く。

要するに・・・熱血タイプが先陣を切った、ということか。

ファウンドはその場を動かなかった。

彼らの気迫に押されているのではない。寧ろ、誰かが来るのを待っている・・・そんな感じがひしひしと伝わってきていた。

モモタロス「おりやあああああ!!」

龍騎S「おりやあああ!!」

剣「おりやあああ!!」

ファウンドは仮面の下でニヤツと笑い・・・彼らの攻撃をそのまま押し返し、そのほか近くにいたライダー達をも巻き込むほどの力で吹き飛ばした。

ライダー達『うわあああ!!』

カブト「・・・くつ、なんてパワーだ・・・!」

アギト「・・・や、やはり嫌な予感当たったな・・・ぐっ!!」

尚、右手に力をこめ、そのまま爆風をおこした。

DCD/F、DED「うわあああ!!」

DCD/F「・・・く、くそ・・・!」

ファウンドは倒れているデイケイドの横に立つ。

そしてそのまま土を蹴り飛ばした。

その衝撃で変身が解けてしまう土・・・

土「ぐうあつ!!!!」

DED「つ、土!!!!」

FOUND「・・・やはりお前は弱いな。」

士「ちつ・・・！ま、まだ・・・終わってないぜ・・・！」

FOUND「そんな姿でどこに戦う力が残っているって言うんだ。だったら・・・これで終わりにしてやろう。」

「FINAL ATTACK RIDE FOUND FINAL
！！」

士はまずい、と思った。

この攻撃をまともに受けたら・・・最後だ。
どうにかして逃げようと努力するが、体が思うように動かない。

士「（悔しい・・・俺の旅は・・・ここで終わりなのか・・・！）」

FOUND「我の力で死ねるのだ。ありがたいと思え。」

すると・・・

士の目には・・・ひとつの光が映りだされていた・・・

T o b e c o n t i n u e ...

第二十三話 平成ライダー集結せよ（後書き）

ファウンド、めっちゃむかつくんですけど（爆
あ、いきなりすみません。水城柳羅です。

自分で書いてて思うんですけど・・・

創設者の言い方、なんか気に障る言い方ですよー・・・
書いてて苛々してくるんですよ！！

次回で・・・こんな最強ライダーとも・・・??

とまあこれ以上いうとだめなので、やめておきます。
それでは、次回二十四話をお楽しみに。

すべてを破壊し、すべてをつなげ！！

第二十四話 戦いの終わり・・・（前書き）

さて・・・！！

とうとう二十四話まできました！

そして、戦いの終わり。

世界はどうなるのか。士たちの運命は？！

後書きにこの小説完結後のことについて

話すつもりですので、最後まで読んでくださいね！

それでは、第二十四話をお楽しみください

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

第二十四話 戦いの終わり・・・

士の前に一つのまぶしい光が放たれていた。

そしてその光がおさまったとき、そこには・・・

士「・・・コンプリートフォーム・・・か？」

士がそれを持つと、そのままディケイドに変身していた。

そのディケイドの姿は・・・

ファイナルディケイドとも違う。ディケイドコンプリートフォームとも違う。

しいていうのであれば・・・

『仮面ライダーファイナルディケイド コンプリートフォーム』

であろうか・・・。

FOUND/F「そ、その姿は・・・!!」

DCD/F/CF「・・・ファイナルディケイドコンプリートフォーム・・・。」

その姿を見た創設者は、少し動揺する。

士の心の奥底に何かが訴えかけるような・・・そんな感じが士はしていた。

そして士は確信する。

士「（このバトル・・・勝てる。）」

DCD/F/CF「この戦い、一人で戦わせてくれ。」

DED「つ、士？何言ってるんだ？」
DCD/F/CF「誰も手を出すな。」

その気迫に押されて、誰も動かなかった。
その様子を見た夏海は不安になった。

夏海「・・・土くん・・・」

DCD/F/CF「ファウンド。お前が粹がってるのもこれでしま
いだ。いくぜ！」

カズマは気まずい思いをしていた。

こんな思いになるくらいなら、士と一緒に創設者と闘いたい・・・。
そんなことを思っていたのには理由があった。

カズマの隣にワタルがいたからである。

ワタルとはライダー大戦の時に自分の世界を守るために戦った相手
で。

自分は彼の仲間を倒し、ワタルは自分の仲間を倒した・・・。

そういうことから、カズマもワタルも気まずかった。会話もない。

それに気づいたのは目の前にいたタクミとシンジだったが、特に何
も言わなかった。

というより・・・何も言えなかった、と言った方が正しいであろう
か。

そのまま二人は士と創設者の闘いの方へ視線を向けていた。

カズマ「・・・な、なあ!!」

ワタル「・・・は、はい？」

カズマ「……この間は……すまなかった。」
ワタル「……え？」

ワタルはカズマのその一言で、少しだけ緊張がゆるんでいた。

カズマ「いや、……あの時は俺の世界のことしか考えられなかったんだ。だから……しばらく気まずくてさ……、はは……。」
ワタル「それは、僕も同じです。」

カズマ「そ、そっか……！」
ワタル「僕は……カズマさんの仲間を倒してしまっただし……。」
カズマ「それを言うなら俺だってお前の仲間を……。」

その二人の様子を遠目から見ていた剣崎と渡は、お互いに微笑み合っていた。

シンジ「ようやく解決ー？」

カズマ「え？」

タクミ「二人ともすごく気まずそうだったから、こっちも気まずかったんですよ。」

ワタル「そ、そうだったんですか……！す、すみません……。」

シンジ「いや、いいんだよ。二人の表情見てるの結構楽しかったし。」

カズマ「おま、！なんだよそれ……！！」

シンジとカズマの言い争いが始まる。

その声を聞いて、アスムやヒビキ、野上やショウイチ、ソウジも集まってきた。

余計に盛り上がりを見せていた。

ユウスケ「盛り上がってるなあ……。」

海東「土は闘ってるっていうのにな。」

ユウスケ「まあ・・・あいつが一人で戦いたいって言ったんだ。土を信じてみようぜ。」

海東「・・・まあ僕はべつにどっちでもいいけど。」

ユウスケ「またまた・・・そんなこと言って土のこと心配なくせに！！」

海東「本当に倒すよ？」デイエンドライバーをユウスケに向ける。

ユウスケ「わ、わかったよ！ごめんて！！」

海東は再び土と創設者の闘いの様子を見つめた・・・。

創設者はやはり押されていた。

息も上がっている。だが、まだ彼には究極の技が残っている。

先ほど見せたあの・・・爆風。

それをされたら元の子もない、そう考えている土はなるべく距離をとっていた。

その様子を察したのか、渡達原典ライダーはいつでも戦える準備をしていた。

それに気づいたショウイチやソウジも彼らに指示する。

ショウイチ「さっきの爆風が来たら、俺たちも突っ込むらしい。」

アスム「ええ？！土さんを守るってことですか？」

ソウジ「いや、そのまま俺らの必殺技と土の必殺技を合わせる。そういうことらしい。」

FOUND/F「・・・、デイケイド。これでお前と闘うのも最後

だ。」

DCD/F/CF「そうだろうな。ここでお前が倒されるんだからよっ!!」

FOUND/F「それはどうかな・・・？」

ファウンドが拳に力を込め始める。

それを見たライダー達は変身をしながら走りだす。

それを見たデイクイドは少し驚くが、何をしようとしているのか大
体わかったようだ。

キバ/E「土さん！いきますよ!!」

DCD/F/CF「ああ！いくぜ!!」

「FINAL ATTACK RIDE ALL RIDER !
!!!!!!」

FOUND/F「ハアアアアアアアア!!」

ALL RIDER「いくぜええええええ!!!!」

大きな爆発音

爆発がおさまったとき。

うずくまる創設者と、傷つきながらもたっているライダー達の姿が
見えた。

その瞬間、夏海の顔には笑顔が戻ってきた。

夏海「土くん!!」

DCD/F/CF「・・・、創設者・・・まだやるのか?」

創設者「・・・くっ・・・」

士は変身を解き、創設者のもとへと近寄る。

創設者の体は少しずつ粒子化されてきていた・・・。

士「・・・?!」

創設者「・・・、我ももう終わりか・・・。この世界は終わった。・・・また、新たな世界を・・・作り出す時が来るまで・・・、我は眠るとしよう・・・。」

士「この世界は救われたのか?」

創設者「どうだろうな、それは我にもわからん。世界を修復するのは私の役目ではない・・・。」

海東「それは僕の仕事かな。」

士「・・・、海東。」

創設者の体はもう半分以上が粒子化されていたが、必死で自分の仮面を取ろうとしていた。

しかし、その行為を止める士・・・。

創設者「・・・?!」

士「お前の姿を見るのはまた今度にしよう。やるよ。」

創設者「・・・ふん。やっぱりお前は甘いな。」

そう言つと・・・

創設者は完全に消えた・・・。

長かったライダー大戦も・・・
これで終わりを迎える・・・。

次回

「仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦」
最終回！！

士達の旅の果てには何が残ったのか・・・
そして、世界の破壊者ディケイドの物語とは・・・

乞うご期待！

第二十四話 戦いの終わり・・・（後書き）

後は最終話とエピローグを残すのみとなりました。

とりあえず土曜日（明日）完結となるのではないかな、と考えています！！

これからのことなんですが・・・

次の小説を更新していこうかなって思っています。

やっぱり次回も「デイケイド小説」です（笑

なんですけど、まだ最終的な構想というか、

終わり方というものが見えていない状態で更新していく状態になってしまいますので、

今回のような更新率にはならないかと思われます。

それでもよければ・・・！

また続けて読んでもらえるとうれしいな、と思います！！

主人公や大まかな小説の内容はまた次回・・・。

それでは、最終話・エピローグでお会いしましょう。

世界を破壊し、世界を繋げ！

最終話 デイクイドの物語（前書き）

最終話ってことで・・・。

なんだ、この展開！！（爆

と思われたかたもいるはずだ。

それは私も思っているから！！（笑

まあ、次のエピソードで真相がわかるよ オイ

世界の破壊者デイクイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

最終話 デイケイドの物語

士は疑問に思っていた。

本当にこれで世界は救われているのだろうか、と。

消滅してしまった世界は・・・もう元には戻らないのではないかと。

渡「士さん、どうかしましたか？」

渡が士に話しかけるが、士は気付いていないのか反応しなかった。そんな士を見て、ユウスケは後ろから近づいた。

ユウスケ「おい！士！！」

士「・・・うわっ？！な、なんだよ！いきなり抱きつくな！」

ユウスケ「ったく・・・。お前が辛気臭い顔してるの似合わないぜ！。紅さんが心配してたんだよ。」

士「・・・え？」

ユウスケ「お前がなんか考え込んでるような表情してたからだろ？」

士「いや、・・・すまん。」

渡「いえいえ。・・・世界のことですか？」

士「あ、ああ。お前の世界は消滅されてるんだろ？そういう世界は修復されないのか、って思ってたな。」

渡は士のその言葉に少しだけ反応したが、それについては何も答えなかった。

渡「・・・でも。少なくともこの世界は救われた。あなた達の世界も。」

士「だがな・・・」

渡「いいんです。しょうがないんです。ディケイドの物語上・・・
そうなることは・・・。」

士「ディケイドの物語だと?」

士のその言葉に、剣崎が続けた。

剣崎「ああ。俺らの世界にはそれぞれの物語があった。だがディケイドによつてその物語は簡単に崩れ落ちた・・・。と、今までは考えてたんだ。前回のライダー大戦でも。」

アスム「つてことは、つまり。本当の原因はあの創設者にあつたつてことですか?」

ヒビキ「そういうことになるなあ。」

アスム「ひ、ヒビキさん!!!!」

アスムはヒビキになつている。彼の世界にいた『ヒビキ』を思い出しながら。

ヒビキも本当の弟子のように・・・そして彼の世界にいた『明日夢』を思い出しながら・・・アスムと接していた。

その様子をニコニコしながら見つめる津上と、そしてその津上のテンションについて行けていないシヨウイチが傍に立っていた。

津上「芦川さんは俺と同じ名前なんですねー。」

シヨウイチ「いや、大体のライダーが同じ名前だぞ。」

津上「あ、ほんとですねえ。乾さんも巧だし、尾上さんもタクミですなえ。」

シヨウイチ「(こ、こいつにはついて行けない・・・。)(」

乾巧と尾上タクミ。

乾の方はずっと黙っている。それを気まずそうにしているタクミ。それに気づいた城戸とシンジは、ニヤツと笑いながらその二人に近

付いた。

城戸「おい！お前ら、全然話してないじゃねえか！」

シンジ「せっかく同じライダー同士が集まってるんだからさ！はあ．．．！取材したい！レンさんも連れてこればよかったなあ．．．。」

乾「はあ．．．めんどくせえ奴に捕まった．．．。」

タクミ「あはは．．．。」

城戸「乾も尾上みたいな奴だったらいいのになあ．．．。」

乾「おい、それどういう意味だよ！！」

シンジ「レンさん．．．」タクミに抱きつく。

タクミ「え、辰巳さん？！」

剣崎はうるたえていた。

勿論原因は．．．剣立カズマのことである。

カズマ「なあなあ！！なんであんなに強いんだ？！教えてくれよ！！」

剣崎「うるさい！！少しは黙ってる！！」

カズマ「えー．．．あの金色のブレイドとかさあ．．．！！かつこよすぎだぜ！！俺もなりたくないなあ．．．。」

剣崎「お前には無理だな。」

カズマ「な、なんだとお？！俺だって．．．！俺だってなってる！！！！」

その様子を苦笑いしながら見ているのが紅渡とワタルだ。

渡「ははは、二人とも楽しそうですねー。」

ワタル「そうですね！！」

渡「ふふつ。」

ワタル「紅さんもバイオリンをしていますか？」

渡「あ、はい。してます。」

ワタル「あのっ！よかったら、僕に教えてほしくて……。」

渡「え……。僕なんかでよければ……？」

ワタル「ほんとですか？！ありがとうございます！！！」

天道とソウジはすみの方のイスに座り、優雅にコーヒー（天道）と茶を飲んでいた。

ずっと黙っている。茶やコーヒーのお代わりを持ってきていた野上は、苦笑いをしながら足早にその場を立ち去っていった……。確かに、この場に長居することは難しいだろう……。

五代とユウスケ、そして夏海と海東はにぎやかに今までの旅のことについて話しているようだ。

五代も旅人だった。その時のことについて楽しそうに話す姿は、夏海達もすごく楽しい気分にさせてくれていた。

五代の話は面白かった。夏海達も土とともに回った世界のことについて語った。海東はやく次のお宝を見つけない、と張り切っていた。それを笑いながら話を聞いているユウスケも楽しそうだった。

誰も。土がないことに気づく者はいなかった……。

土がないことに気付いたのは、それからだいぶたった後のこと。

土は城を出て、歩いていた。

ただ、ひたすら。何の目的もないまま。

この世界に来てから、一回も帰っていない場所。それは……

土「……写真館。」

何の建物もないこの地で、唯一たっている建物。

その中には夏海の祖父である栄次郎がいて……。

いつも自分が撮ってきた写真をファイリングしてくれていた。ボケボケの写真も「味があつていいよ。」と言ってくれた。

自分がこの写真館に居座つた理由に、彼の存在があるからかもしれない。

気分が落ちているとき、いつも笑つて励ましてくれた。

そんな彼に……自分は何かしてあげられていたのだろうか。

士「……またいつか、な。」

結局士は写真館の中へ入ることなく、その場を去つていった。ドアの近くに、自分の愛用のカメラを置いて……。

夏海達は士を探しに、写真館に戻ってきていた。

ドアの近くに何かが置いてあるのを、海東が見つけた……。

海東「……これは……士の……。」

ユウスケ「……嘘だろ？」

夏海「な、なんで……。」

三人はショックを受けていた。

士が、何も言わずに去つていったことだけではない。カメラを置いていったことでもない……。

『もう士には会えない。』

そんな思いが強くなりすぎてしまったことだった……。

そんなとき、写真館のドアが開いた。

そこに立っていたのは、笑顔の栄次郎だった。

栄次郎「ああ、おかえり。・・・おや？それは土くんのカメラ・・・」

泣いている夏海、泣きそうなユウスケ、うつむいている海東を見て、栄次郎は何かを悟った。

それでも、それでも彼は笑顔でこう言った。

栄次郎「現像しないとね。ああそうだ。クッキー焼いてあるよ。食べておいで。」

Fin...

エピソードに続く...

最終話　デイケイドの物語（後書き）

個人的に、Wの最終回がエピソードっぽく感じてます。

なんていうか・・・剣みたいな終わり方でもよかったのでは？

と考えてしまうのですが、Wの場合は冬の映画もあるので

ああいう形を取らなければいけなかったのかなあ、と思います。

この小説は・・・という形をとるのか。

次のエピソードを読めば全てわかりますよ・・・（ニヤッ

それでは、次回作についてちよろつとお話します。

次回作は、デイエンドとデイケイドがメインの小説です。

彼らの最初の関わりというか・・・なぜ海東は土のことを

知っていたのか、というのにずっとひっかかっています。

なので、小説を書くこう！と思ったのです。

前回も言いましたが、まだこの小説の終わりが見えておりません。

全て執筆作業が完了しているわけではないので、

今回の小説のような更新スピードは無理かと思われます。

それでもよければ！続けて読んでくださるとうれしいです。

それでは、エピソードでお会いしましょう。

全てを破壊し、全てを繋げ！

エピソード 旅の終わり（前書き）

世界の破壊者ディケイド。

ライダー大戦の世界をめぐり、その瞳は何を見る？

エピローグ 旅の終わり

士が夏海達の前から消えて早2週間がたっていた。

その間にかわったことといえば……。

ユウスケが自分の世界へ帰っていった。海東が他の世界のお宝を探しに行った。

勿論、二人とも士を見つけたら連絡をくれ、と言って。

ここは光写真館。

士が来る前と同じ……いつもの写真館に戻った……。

そして夏海の世界に戻ってきて……。

久しぶりに会う友達や近所の人……。

それを見るたびに自分の世界に戻ってきたんだと実感する。

でも。何かが違う気がする。

いつも近くには士がいた。

外で勝手に写真を撮ってきては、クレームの人が写真館に押し寄せてくる。

そのたびに夏海は士を叱りに行って……。

ユウスケ達がいなくなってから、彼女はボーっとしているときが多かった。

そんな様子を栄次郎は心配しながら見ていたが、彼は何も言わなかった。

彼女がこんな様子になっている原因を知っているからだ。

栄次郎「夏海、コーヒーでも飲むかい？」

夏海「あ、はい……。」

栄次郎は3つのコーヒーカップを持って夏海のもとに来た。

夏海「おじいちゃん・・・それ・・・」

栄次郎「あれ。また土くんとユウスケくんのも注いじゃったなあ・・・」

夏海「・・・、。」

夏海は土と出会って、旅を始めたころのことを思い出していた。最初の世界はクウガ・・・ユウスケと出会った世界だった。今までいろいろな世界を旅していたんだなあ、と思う。土の写真が入っているアルバムを見ても。思い出す。

夏海「・・・土くん・・・戻ってきて・・・」

そんな孫の様子を見て、栄次郎はふと窓の外を覗いた。そしてこうつぶやいた。

栄次郎「・・・これが本当の世界だったのか。」

夏海「・・・え？おじいちゃん、何か言いましたか？」

栄次郎「・・・いや、なんでもないよ。さて、プリンでも作ろうかな。夏海、手伝ってくれ。」

夏海「・・・はい！」

夏海はこんな風に考えた。

土がいなくなってしまった理由を。

いなくなつたのではない・・・。また前に戻つたのだと。

きっと・・・またあのときのように・・・。

ふらっとこの世界にやってきて・・・どこかでまた写真を撮っている。

そしてその足で・・・この写真館にたどり着くのではないかと。

夏海「・・・そんなわけないですよね。」

夏海はそのまま栄次郎のもとへと急いだ・・・。

時は過ぎ、あれから1年がたった。

久しぶりに海東やユウスケが夏海の世界に遊びに来ていた。

海東「あれから土には会ったかい？」

夏海「いいえ・・・全く。」

ユウスケ「・・・創設者が消えたように、土も消えちゃったってことはないよな？」

海東「考えられなくはないけど。それは多分違うな。」

夏海「まあ、とりあえず！せっかくおじいちゃんがクッキーを焼いてくれたので食べましょう！」

ユウスケ「そ、そうだな！！落ちててもしょうがないしな！！」

海東「・・・ま、それもそうかな。」

ユウスケ「あ！！こら！海東！それ、俺がとっておいたやつだろ！！」

海東「奪われる君が悪いのさ。」

ユウスケ「なんだとー？！」

海東「そんな君にはこのクッキーをあげるよ。」

ユウスケ「おっ！！いいところあるじゃねえかあ！！いっただっきまーす！！」

海東「（それ、ニンジン入りだけどね）」

ユウスケ「ぐふっ！！！！」

夏海「ユウスケ汚い!!!」

ユウスケ「こ、これ!!!!ニンジン入ってる!!!海東!!!わざとだな!!!!」

海東「好き嫌いをする君が悪い。」

二人の争いから離れた夏海。

すると、呼び鈴が聞こえた（ように感じた）。

夏海「あ、はい!!!ちょっと待ってくださいねー!!!」

夏海は玄関へ向かい、ドアを開ける。

そして目の前にいたのは。

夏海「どなたですか・・・?!」

?「これ、現像してほしいんだけど。」

夏海「・・・つ、土くん・・・?!」

目の前にいた男は夏海を見て微笑んだ。

土「・・・ナツミカン、ただいま。」

Fin!!

エピローグ 旅の終わり（後書き）

エピローグです！！いかがでしたでしょうか？

個人的には、おもしろーい終わり方になったかな、なんて思ったりしてます（笑

でも、いい終わり方にしてくて・・・がんばりました。

ブレイドみたいな終わり方でもいいかなあって

思っただんですけど・・・やっぱり・・・ね（笑

デイクイドってすつきり終わった感じがしないじゃないですか？
なので、すつきり終わらせたくて・・・こうなりました（笑

個人的に、ライダー大戦の小説はずっと書きたかったものでした。

しかし、私には一番の弱点があつて・・・。

戦闘シーンが書けない！戦闘描写がわからない！という。

なので、もうほとんどワンパターン・・・（汗

申し訳ない気持ちでいっぱいです・・・><;

もつと頑張らなきゃなーって思います！！

それでは、また次回作でお会いしましょう！！

次回作は下記のアドレスです！！ぜひ、これからも
読んでいただけると嬉しいです。

よろしく願います！！！！！！

<http://ncode.syosetu.com/n89190/>

この後、総括を書いてこの小説を終わらせようと思います。
これまで応援していただき、ありがとうございました。

水城柳羅

総括：仮面ライダーディケイドという作品

「仮面ライダーディケイド」という大きな作品を見たのは、実は今年に入ってからだったと思います。4月くらいだと思います。なぜその時期に見たのかといいますと。

高校生時代は特撮作品ノータッチという生活を送ってしまして（汗いろいろと理由はあるのですが、そのことはとりあえず置いておきます）。

ディケイドに出ている俳優がカッコいいよっていう・・・不純な理由で

見始めたわけですよ、私は・・・（笑）

それから、平成ライダーが大集結！という噂もちらりと聞きまして、「それは面白そうだ！」と。思ったわけです。

見始めてすぐに・・・第一話の冒頭シーンを見てハマりました。なんだかスケールが大きいな、と。

役者の技量は置いておいて、とにかくすごいな、と。半年で終わった、というのは知っていました。

こんなスケールの大きいものを半年で終わらせられたのか、と。で、最終回まで一気に見終えたんです。

そこで、あの有名な「偽予告」ですよ（爆）

この時点で、もうすでに本当の映画は公開されています。でもまだDVD化は

されていない時期だったんですよ。なので見ていません。だからあの「偽予告」に興奮しちゃったんですよ（爆）すごい！と。こんな面白そうな映画、作っちゃうんだ！と。

まあ・・・思いつきり裏切られるんですけどね（笑）

そこがまたディケイドらしいなあと思えばそうなるんですけど。その映画を見た時は本当に信じられなかったですね、え、これがそうなの？って。

信じられなかったというより、戸惑いました。

そのときくらいからかな、小説が書けそうだ、と思ったのは。

これは絶対に面白い小説が書ける。そう確信しました。

ただ・・・私にそんな技量があるとは思えなかったんですよ、その時点で。

他の方が書いているディケイドの小説もあまり見ないようにしました。

（もちろん、今は読んでいますが・・・笑）

一度他の内容のディケイド小説を書こう！と思い立ち、

小説ブログを立ち上げたこともあります。でも挫折しました。あま

りにも書けなくて。

やっぱり、超長編作は無理だな、と。

だったら、いい情報があるんじゃないか、と。
「ライダー大戦のあの偽予告をふんだんに使って書いてみよう」と
思い立ったわけです。

まあ、戦闘シーンの雑さは目をつぶっていただいて・・・（汗
目をつぶれないほど雑なのはわかっています。自分でもああ、だめ
だなこれ。って

何回も思っています。何回も書きなおそう！って思いました。
でも書き直したところで、うまくなるかといえばそうでもないんで
すよね。

書いているうちにやっぱり戦闘シーンが増えてくるわけで。
結構省いてしまったところとかもあります。（龍騎のカードとかあ
まり覚えてないので）

それでも読者の方がいるというのは・・・えええ?!と思つてしま
うわけです(爆
すぐうれしいことだし、喜んでいいはずなんですけど・・・。
なんだか気分が乗らないというか・・・褒められると余計にわから
なくなつてしまふというか。

自分がうまい書き手だなんて、誰も思つていないと思います。
本当の小説家の方でも、どこかには荒いところがあつたりするかと
思ふんです。

私にはその荒いところしかない、とは思いますが・・・(笑
書いていく中で、やっぱり自覚したのは戦闘シーンの雑さ。話のつ
ながりが雑。

私がいちばん当てるのはこの二つです。

でもきつと読んでくださつてくれる方にとっては、もっとあると思ふ
んです。

どんどん自分が思つたことをズバズバと言つてもらつて構いません。
勿論傷つきはしますが、それが本当の読者の声なんだと、自覚しな
ければいけないと思ふので。

それを踏まえて、次回作へとつなげられる。そう私は思つています。

なので・・・。

今までひっそりと読んでくださつていた方。

こういう形でもかまいません。

ぜひ、この小説を読んで、自分が本当に思つたことを素直に打ち明
けてほしいのです。

そうすることによつて自分の中にあるものが少しは変われるかな、
と思ふので・・・。

ぜひ、よろしく願ひします。

それでは、また、次回作でお会いできることを楽しみにしております。

約1ヶ月間、ありがとうございました。
これからもよろしくお願いいたします。

水城柳羅

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になろうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連「横書き」という考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n3873o/>

仮面ライダーディケイド 本当のライダー大戦

2010年12月23日00時32分発行